第三部　専制政治に抗して[1]――文学者からペンの決闘家へ――

第１章　　文学上での個の自由の闘い

――第１節　　『殉教者たち』の同時代性

第一部において、シャトーブリアンが 18 世紀の廃墟の美学の継承者であることを既に見てきた。1803-1804 年のフランス大使書記官としてのイタリア滞在は、外交官として上手に立ち回れず、閑職に甘んぜざるを得なかったおかげで、イタリア各地の資料収集ができ、のちの執筆活動に役立てられた。とりわけローマには、異教とキリスト教、双方の遺跡や廃墟が残っており、その自然の風景ともあいまって、『イタリア紀行』に収められた「フォンターヌへの手紙」« Lettre à M. de Fontanes » (Rome, le 10 janvier 1804) に見られるように、シャトーブリアンは感銘を受けたのである。

> L'aspect d'un champ de bled ou d'un coteau de vigne ne vous donneroit pas d'aussi fortes émotions, que la vue de cette terre dont la culture moderne n'a pas rajeuni le sol, et qui est demeurée antique comme les ruines qui la couvrent.
>
> Rien n'est comparable pour la beauté aux lignes de l'horizon romain, à la douce inclinaison des plans, aux contours suaves et fuyants des montagnes qui le terminent.
>
> 麦畑やブドウ畑の光景は、現代の文化が一新することなく、そこを覆う廃墟と同様に古代に留まっている、この土地の眺めと同じくらい強い感動をあなたに与えることはないでしょう。
>
> 美しさにおいて、ローマの地平をつくる線、前景から後景への穏やかな傾き、その地平を限る山々の滑らかな、遠ざかる輪郭に比べられるものはないのです。(*Voyage en Italie*, pp. 696-697.)

---

[1] despotisme 専制政治という語は、為政者ひとりの暴虐な行為に起因する tyrannie 暴政とは異なり、政治機構が抱える問題を示唆する。アリストテレス以来、東方の君主制に対して用いられてきたが、フェヌロン、サン＝シモン Saint-Simon、ブーランヴィリエ Boulinvilliers といったルイ 14 世の政治に反対する一派によって初めてフランスについて適用された。そして 18 世紀後半には基本的な政治概念のひとつとして定着していた。Cf. Mervin Richter, « Le concept de despotisme et l'abus des mots », in *Dix-huitième siècle, revue annuelle publiée par la Société française d'étude du 18e siecle*, P.U.F., nº 34, 2002, pp. 380-381, 387.

このシャトーブリアンの感動は、『殉教者たち』の主人公ウドールが初めてローマを見たときの陶酔に反映されている。

Ce Chemin (=la voie Appienne) […] vient se terminer à la Ville Éternelle, métropole de l'univers et digne de l'être. À la vue de tant de prodiges, je tombai dans une sorte d'ivresse que je n'avais pu ni prévoir, ni soupçonner. […] La grandeur de l'horizon romain se mariant aux grandes lignes de l'architecture romaine.

この道（=アッピア街道）は（中略）世界の首都であり、またそれにふさわしい＜永遠の都＞で終わることになる。これほど多くの驚異的な建造物を目にして、私は、予想することも、疑ってみることもしなかった、一種の陶酔状態に陥ったのだ。（中略）ローマ建築の壮大な輪郭と調和しているローマの地平線の崇高さよ。(*Les Martyrs*, p. 160-161.)

また、自然の生み出すものの永続性と人間の作り出すもののはかなさとの対比も、ウドールはシャトーブリアンと同じ言葉で表現する。リヨンを発ち、アルプスを越えたシャトーブリアンは「人間に由来するすべてのものは、こうした場所において貧弱で壊れやすい[2]」と記していて、こうした印象は、作者とは反対にイタリア側からガリアに向かってアルプスを越えるウドールの語りのなかで、『イタリア紀行』を練り直した状態で現れる。

Tout ce qui vient de la nature dans ces montagnes me parut grand et indestructible ; tout ce qui appartient à l'homme me sembla fragile et misérable.

こうした山々において自然に由来するすべてのものは、私には偉大かつ不壊であるように思えた。一方、人間に属するすべてのものは、私には壊れやすくてつまらなく見えた。(*Les Martyrs*, p. 192.)

このようにシャトーブリアンの美学的感性と 1803－1804 年のイタリア経験とは、『殉教者たち』の主人公に引き継がれていることが分かる。次いでシャトーブリアンが 1805-1806 年にかけて行った東方旅行は、キリスト教叙事詩としての『殉教者たち』を仕上げるための取材旅行であった。訪問先がギリシア、コンスタンティノープル、ロードス島、死海、

[2] *Voyage en Italie*, p. 630 : « Tout ce qui vient de l'homme dans ces lieux est chétif et fragile ».

エルサレム、エジプト、チュニスなどである以上、キリスト教の記念物以外にも多くの異教の廃墟を目にするわけであり、1803-1804 年のローマ滞在時に比べて、役職を辞任してナポレオン政府から距離をとったことも相まって、よりいっそう政治的、道徳的な視点を拡大していくことになる。ただし、注意しておかねばならないのは、旅行の出発の段階で、ベアトリス・ダンドローの研究[3]でも明らかなように、すでにウドール自身が語り聞かせる旅の物語はほぼ出来上がっており、東方旅行でシャトーブリアンが目にした風景がすぐさま叙事詩に描かれているのではないことである。この点については、作者自身が『殉教者たち』の第 3 版に付した「検証」« l'*Examen* »において返答しているように、作者のほうが、むしろウドールの旅の軌跡をたどっているともいえるのだ[4]。

そこで、現実の旅行体験とそれを元に練り直された作品との関係性を見るために、東方旅行から生まれた『パリ＝エルサレム紀行』(1811)を一瞥しておくことにしよう。アラン・ギヨーによれば、東方旅行の直後に書かれた初期段階のいくつかの文章（日記、『メルキュール・ド・フランス』*Mercure de France* への投稿）、『殉教者たち』、『パリ＝エルサレム紀行』とでは、それぞれのテクストの主題や目的が異なることから、文体の変化が生じている。旅から時間が経っていない時点での文章と比べて、『殉教者たち』では物語の状況に沿って風景の脚色や動詞の現在形の使用による「劇化」« la dramatisation » が起こっている。さらにその後で公刊された『パリ＝エルサレム紀行』になると、事実を報告しようとする意思が感じられるニュートラルな語りに戻るものの、動詞の時制が複合過去から単純過去へ変化したり、『殉教者たち』で脚色に用いた語が再登場したりすることで、単なる旅の報告ではなく、主観的な視点も備えた自伝的空間を備えたものとなっていく[5]。このように『パリ＝エルサレム紀行』では、作者が旅で目にした風景は見たとおりではなく、想像力でその色彩を調整されているのであるが、それはフィリップ・アントワーヌが述べているように、過去の偉大な文学テクストを参照して学識を顕示するためであるのと同時に、さらに自分自身を引用することで、自らのテクストを「文学史のひとコマ」« un moment de l'histoire de

---

[3] *Les Martyrs de Dioclétien, version primitive et inédite des Martyrs*, éd. cit..

[4] Préface de la troisième edition ou *Examen* des *Martyrs*, (1810), Pléiade, p. 85 : « *Les Martyrs* étaient achevés en grande partie, principalement le récit d'Eudore, lorsque je suis parti pour l'Orient : […] Ainsi ce n'est point Eudore qui voyage en Égypte, en Syrie, en Grèce, parce que j'ai voyagé dans ces contrées célèbres, mais c'est moi qui suis allé voir les bords que mon héros a parcourus ».

[5] Alain Guyot, « Un point de vue stylistique sur la genèse du récit », in *Le Voyage en Orient de Chateaubriand*, textes présentés par Jean-Claude Berchet avec le concours de la Société Chateaubriand, Éditions Manucius, 2006, pp. 70-71, 74, 79 (pp. 65-87).

la littérature » にしようと意図している側面がある[6]。そして同様の現象が、『殉教者たち』にも起こっている。つまり旅行記も叙事詩も、シャトーブリアンが実際に目にした光景が忠実に描写されているのではなく、彼の頭の中に再構築された世界が読者に提示されているのだ[7]。例えば、『殉教者たち』のシモドセのヨルダン川との遭遇（第 19 巻、pp. 414-415.）は、『解放されたエルサレム』のなかでエルミニアが平和なヨルダンの川辺にたどり着く場面に結び付けられるし、『パリ＝エルサレム紀行』のエルサレムの章では、作者タッソやエルミニア、ゴッドフロワらに思いを馳せるシャトーブリアンが登場する（*Itinéraire*, pp. 425-440)。こうした点から、紀行文をさまざまなジャンルのテクストの混成状態とみなし、フィクション（文学）としての可能性を見出すことが行われるようになっている。したがって、『紀行』と『殉教者たち』とでは、それぞれ 19 世紀と 3 世紀末という時代設定の時間差があることから、同じ地理上の風景であっても、作家の意図によって異なった様相を呈する場合も出てくる。実際、『紀行』で描かれるギリシアは、歴史的な地点を特定する遺跡が失われ、異教徒に支配されて民度も落ちてしまっており、旅人は大いに嘆いている。少し長くなるが、スパルタがあったと思しきあたりを作家が訪れた時の様子をみてみよう。

> Encore si la vieille Sparte, comme la vieille Rome, avait levé sa tête défigurée du milieu de ces monuments nouveaux ! Mais non : Sparte était renversée dans la poudre, ensevelie dans le tombeau,

---

[6] Philippe Antoine, *Les récits de voyage de Chateaubriand*, Paris, Honoré Champion, 1997, pp. 61-62 : « Le narrateur, de même qu'il voyage avec et dans les textes, vit sa propre vie en l'évaluant sans cesse à l'aune de sa culture, comme s'il lui était nécessaire de se référer à ceux qui l'ont précédé pour réellement vivre les situations ou comme s'il s'aggissait pour lui d'affirmer que sa vie — ou l'écriture de sa vie — faisait partie de ces ‹ monuments › qui sont le bien commun de l'homme de culture. En citant, Chateaubriand n'est pas seulement à la recherche de filiations ; il désigne aussi son texte comme un moment de l'histoire de la littérature ; et cette préoccupation trouve un écho dans une autre pratique de l'auteur, qui consiste à se citer lui-même, tout autant que ses illustres prédécesseurs. […] Les contemporains de Chateaubriand ont reproché à l'*Itinéraire* sa trop grande érudition ; […] Pour Chateaubriand, une expérience, pour être forte et accéder à une réelle existence, a besoin de se réfléchir dans les grandes textes du passé ».

[7] Sarga Moussa, « Usages de la fiction dans le récit de voyage : l'épisode de la mer Morte chez Lamartine », in *Roman et récit de voyage*, textes réunis par Marie-Christine Gomez-Géraud et Philippe Antoine, Presse de l'Université de Paris-Sorbonne, 2001, pp. 47-54. ラマルティーヌは『東方紀行』のなかで、シャトーブリアンの紀行文が、現実に目の前に存在するものを見ておらず、作者のすでに持つ知識でできた幕を現実の上に広げていると、暗に非難しているという(p. 50)。しかし 19 世紀のオリエンタリスムと旅行記の研究者サルガ・ムサによれば、ラマルティーヌやネルヴァルらの「想像的、主観的空間」としての紀行文と、「近くからの、正確な観察」を重んずるフローベールやデュ・カン Du Camp らをその代表とする客観的紀行文という、19 世紀において紀行文ジャンルが揺れ動くことになる二極の傾向を、シャトーブリアンの『パリ＝エルサレム紀行』が啓示したのである。Sarga Moussa, « Les catégories de la différence », in *Le Voyage en Orient de Chateaubriand*, op. cit., p. 334 (pp. 325-339.).

foulée aux pieds des Turcs, morte, morte tout entière ! […] Mon cicerone savait à peine quelques mots d'italien et d'anglais. Pour me faire mieux entendre de lui, j'essayais de méchantes phrases de grec moderne ; je barbouillais au crayon quelques mots de grec ancien ; je parlais italien et anglais, je mêlais du français à tout cela. Joseph voulait nous mettre d'accord, et il ne faisait qu'accroître la confusion ; le janissaire et le guide (espèce de Juif demi-nègre) donnaient leur avis en turc, et augmentaient le mal. Nous parlions tous à la fois, nous criions, nous gesticulions ; avec nos habits différents, nos langages et nos visages divers, nous avions l'air d'une assemblée de démons perchés au coucher du soleil sur la pointe de ces ruines. […] Les larmes me vinrent aux yeux, en fixant mes regrards sur cette misérable cabane qui s'élevait dans l'enceinte abandonnée d'une des villes les plus célèbres de l'univers, et qui servait seule à faire reconnaître l'emplacement de Sparte ; demeure unique d'un chevrier, dont toute la richesse consiste dans l'herbe qui croît sur les tombes d'Agis et de Léonidas.

昔のスパルタが、昔のローマのように、これらの最近できた記念物のなかに、その変わり果てた首をもたげてくれさえしていたら！いや、違う。スパルタは塵のなかに破壊されてしまっており、墓のなかに埋もれ、トルコ人に蹂躙され、死んでいる、全土が死んでしまっていたのだ！（中略）私の観光ガイドはイタリア語も英語もほとんど知らなかった。私は彼の言うことを少しでも理解しようと、現代ギリシア語のお粗末な文を使おうと試みた。それに古代ギリシア語のいくつかの語を鉛筆で書き殴ったりもした。私はイタリア語と英語を話していたが、そのすべてにフランス語が混じっていた。ジョゼフ（＝シャトーブリアンの通訳兼召使い）は我々に意見の一致をもたらそうと望んだが、混乱を増すことしかしていなかった。イェニチェリ（＝トルコの近衛兵）と案内人は（半分黒人の血が入ったユダヤ人だったが）彼らの考えをトルコ語で話していたので、ますます難儀した。私たちは一斉に話し、叫びをあげ、身振り手振りで意思疎通をしようとした。私たち一人一人で異なる衣服、多様な言語と顔立ちのせいで、私たちはまるで日没時にこれらの廃墟の先端にとまって会議を催している悪魔どものようであった。（中略）私の目からは涙が流れ出し、私はそのみすぼらしい小屋に視線を注いだ。その小屋は、この世界で最も有名な町のひとつの打ち捨てられた囲いのなかに建っており、それだけがかつてスパルタのあった場所を知らせてくれるものだったからだ。それはひとりのヤギ飼いの唯一の住まいで、彼の持てる富すべてはスパルタ王アギス 4 世とレオニダースの墓の上に生える草にあるのだ。(*Itinéraire*, p. 124, 126.)

一方、『殉教者たち』ではローマに覇権を奪われた斜陽の文明とはいえ、ギリシアは未だ

威厳を保ち、その風景は古典主義絵画のごとくにギリシア神話を彷彿とさせる。甘美な夜[8]の空気のなかに異教の神々の息吹を感じているシモドセに向かって、ウドールは「私は（キリスト教の）神の栄光を語りかける星々をただただ見ているのです」« Je ne vois que des astres qui racontent la gloire du Très-Haut. »(*Les Martyrs*, p. 115)と言うのである。このように、叙事詩においては、美しい夜の空は神の存在を啓示するという意味づけがされている。『殉教者たち』には叙事詩としての舞台演出が施されているのに対して、旅行記には 19 世紀のギリシア情勢を盛り込んだうえに、「会議を催している悪魔どものよう」と、『失楽園』の悪魔の会議場にまで茶化されている。

ところで、かなりのちに『フランス史の理論的分析』*Analyse raisonnée de l'Histoire de France* (1831) において、シャトーブリアンは、ルイ 14 世とナポレオン Napoléon を、社会の騒乱を背景に自由を犠牲にして秩序をもたらした専制君主として論じていた。そのくだりに、古代ローマのディオクレティアヌス帝を引き合いにだす部分がある。

> Louis XIV eut quelque chose de Dioclétien, sans en avoir les mœurs et la philosophie ; il établit comme lui le faste de l'Orient à sa cour, éleva comme lui des monuments, et fut comme lui grand administrateur.
>
> ルイ 14 世はディオクレティアヌス帝と同じ何がしかのものを持っていた、ただし、その生活態度と哲学とを備えることなしにであった。ルイは、ディオクレティアヌスと同様、自らの宮廷に東方の豪奢をうちたて、帝と同様、記念碑を建立し、帝と同様、偉大な行政官であった。(*Analyse raisonnée de l'Histoire de France*, p. 482.)

ルイ 14 世をディオクレティアヌス帝に重ね合わせるとなれば、我々は『殉教者たち』のディオクレティアヌス帝の姿に、ナポレオンを連想することもできよう。1809 年に公刊された『殉教者たち』は、ディオクレティアヌス帝治末期のキリスト教弾圧と、コンスタンティヌス帝によるキリスト教公認が題材であるが、しばしば、作中人物にはシャトーブリアンの同時代の人物像が反映されているのではないかと想像されてきた。例えば、物語の中でキリスト教徒迫害にディオクレティアヌスよりも積極的な役割を果たす副帝ガレリウ

---

[8] *Les Martyrs*, p. 112 : « C'était une de ces nuits dont les ombres transparentes semblent craindre de cacher le beau ciel de la Grèce : ce n'étaient point des ténèbres, c'était seulement l'absence du jour. L'air était doux comme le lait et le miel, et l'on sentait à le respirer un charme inexprimable ».

スにはナポレオン、重臣ヒエロクレスには警視総監フーシェ Fouché が反映されているとも言われてきた。しかし、これは慎重に考える必要がある。『殉教者たち』が執筆されていた当時の政府、ナポレオン帝政を真っ向から風刺するような行為は、あまりにも危険すぎており、現実問題として難しいという意見もあるからである。確かに、大革命の恐怖政治によって家族を失っているシャトーブリアンが、時の権力の機嫌を決定的に損ねるような、軽率な比喩や風刺をするとは考えにくい上に、実際のところ、フーシェが管轄する出版検閲をこの作品は難なく通過しているのだ[9]。

しかし、次章以降で詳細は検討するが、シャトーブリアンは専制主義に対する敵意や恐れを常に抱いている。実際、『パリ＝エルサレム紀行』のコンスタンティノープルの記述では、このイスラム都市の美しい姿は徐々に後方に押しやられて、街の中心に陣取るスルタンの王宮を「隷属のカピトリウムの丘」« Capitole de la servitude »と呼び、そこでこそ、「聖なる番人」（＝スルタン）が、「ペストという病の芽と、圧政の基本となる法を入念に保存する場所である」« un gardien sacré conserve soigneusement les germes de la peste et les lois primitives de la tyrannie »と断言する(*Itinéraire*, p. 258)。さらに、ずっと後になって、『殉教者たち』を 1826 年ラドヴォカ版全集に入れる際の序文においては、以下に引くように、シャトーブリアン自身がこの叙事詩の執筆時期との同時代性を認めてもいるし、『墓の彼方からの回想』でもほぼ同じ認識を繰り返している[10]。

> Au reste, cet ouvrage me valut un redoublement de persécutions sous Buonaparte : les allusions étaient si frappantes dans le portrait de Galérius et dans la peinture de la cour cour de Dioclétien, qu'elles ne pouvaient échapper à la police impériale ; d'autant plus que le traducteur anglais […] avait fait, dans sa préface, remarquer les allusions. Mon malheureux cousin, Armand de Chateaubriand, fut fusillé à l'apparition des *Martyrs* : en vain je sollicitai sa grâce ; la colère que j'avais excitée s'en prenait même à mon nom.
>
> そもそも、この作品は私にとってブオナパルテのもとでの迫害を倍加させるものだった。（帝政への）ほのめかしは、ガレリウスの人物像やディオクレティアヌス帝の宮廷の描写において、とても強い印象を与えるものであったために、それらは帝国警察から逃れることができなかったのだ。イギリス人の翻訳者が（中略）彼の序文の中でそれらのほのめかしに注目さ

[9] Guy Berger, « Ouverture de la journée-colloque : le bicentenaire de la parution des *Martyrs* », in *Bulletin de la Société Chateaubriand*, nº 52, 2010, pp. 59-60.
[10] *M.O.T.*, t. I, Livre XVIII, chapitre 6, p. 834 ; note 15, pp.1471-1472.

せただけ、ますますそうであった。我が不幸なるいとこ、アルマン・ド・シャトーブリアンは『殉教者たち』公刊の折に銃殺された。恩赦を求めたが無駄であった。私が引き起こした怒りは私の名前さえ責めたのだ。(*Les Martyrs*, « Préface de l'édition de 1826 », p. 104.)

上に登場するアルマン・ド・シャトーブリアンは、1808 年 9 月、王族らの書簡の連絡係を務めていたが、嵐で遭難して発覚し、王党派の陰謀の首謀者として逮捕され、翌 1809 年 3 月 31 日に銃殺された[11]。また、英語版『殉教者たち』*The Two Martyrs ; a moral tale by the vicomte de Chateaubriand* は 1812 年に出されたが（第二版は 1819 年）、その英訳者であるカトリック教徒の W・ジョゼフ・ワルターW. Joseph Walter による序文を覗いてみよう。

Il est visible que certaines parties de cet ouvrage ont été considérées, sur le continent, comme comportant une interprétation politique, et que, sous les traits de tyran Glérius, le rôle du chef actuel de la France est examiné avec une sévérité aussi pénétrante que mordante. La conversation de Galérius et de Dioclétien, au seizième livre, a été considérée, en particulier, comme un exemple frappant de ce genre de critique politique. Et je ne puis m'empêcher de confesser ici, bien que le sujet me soit assez peu familier, combien je suis frappé de la ressemblance entre la harangue du sophiste Hiéroclès, au quatorzième livre, et les discours de certains champions modernes de l'intolérance. […] Plût à Dieu que nous n'eussions pas, au siècle présent, d'imitateurs d'Hiéroclès, et que les favoris d'un Galérius voulussent bien réfléchir que Rome exige l'union de toutes les sectes, au moment où les hordes d'un second Attila, second fléau du Tout-Puissant, se préparent à fondre sur l'Empire pour le ruiner !
明らかに、この作品のいくつかの部分は、ヨーロッパ大陸では、政治的解釈を含んでいると考えられていて、暴君ガレリウスの面差しのうちに、フランスの現在の国家元首の役割が痛烈に容赦なく考察されている。ガレリウスとディオクレティアヌスの第十六巻における会話は、とりわけ、こうした類の政治批判の際立った例である。そしてこうしたテーマは私にはほとんどなじみがないにもかかわらず、私は、第十四巻での（実際は第十六巻）ソフィスト・ヒエロクレスの演説と、何人かの現代の不寛容の擁護者たちの弁舌との間の類似にどれほど驚いたか、ここで告白せざるをえない。（中略）我々の世紀に、ヒエロクレスの模倣者がいなければよかったのに、そして、第二のアッティラ、つまり全能の神による第二の懲罰であるのだが、そうした暴徒が帝国に溶け込み、帝国を滅ぼそうとしている瞬間に、ローマは全て

[11] *Ibid.*, Livre XVIII, chapitre 7, pp. 834-840 ; note 18, p. 1473.

の党派がひとつに結束することを求めていることを、ガレリウスのような人物の寵臣らが、よく考えてくれますように[12]。

このように、英訳者は、おそらく政治的なコメントをフランス国内の人間よりも思いつくままに書いたと推測されるものの、公刊当時から『殉教者たち』にナポレオン治世下のフランスを重ねあわして読む見方が存在していたことは明白である。

――第２節　　「殉教」という象徴と国民意識形成

ところで、『殉教者たち』の同時代性を考えようとするとき、大革命後間もない 19 世紀初頭における「殉教」という言葉や行為の意味をあらためて検討しておかねばならないであろう。ルイ 16 世がどれほど優柔不断で、有事には不適格な国王であったとしても、それでもやはり、旧体制が消滅し、新時代が生まれるための「殉教者」であったと、しばしば形容されてきた。また、絶対王政下においては言論の自由を擁護し、革命下にあってはルイ 16 世の弁護人となったマルゼルブの 1794 年の処刑は、あらゆる圧制に抵抗し続けた一貴族の、自らの「人間の大義の擁護[13]」という理念を貫いた結果としての「殉教」と見なすことも可能である。さらに遡ると、そのマルゼルブ自身が、1789 年の『出版自由論』のなかで、『エミール』公刊で逮捕状が出されたルソーのことを思い起こした際には、「私は個人的に彼のことを知っており、皆は彼が自分自身を描いたとき（『告白』のこと）から彼を知っている。ルソーは殉教の勇気を自らに感じていたし、殉教の栄光も望んでいた[14]」と書いており、ルソーが自分自身の大義のために殉教することを惜しまない人物であったと讃

---

12 *Ibid.*, Livre XVIII, chapitre 6, note 15, pp. 1471-1472.

13 木崎喜代治『マルゼルブ、フランス十八世紀の一貴族の肖像』岩波書店、1986 年、349 頁。C.f. Boissy d'Anglas, *Essai sur la vie, les écrits et les opinions de M. de Malesherbes*, 3 vol., Paris, Chez Treuttel et Würtz, 1819-1821. Cet ouvrage, Seconde partie, 1819 (Nabu Public Domain Reprints, 2010), p. 155 : « Il avait vécu comme Socrate. […] On peut dire qu'il honora l'espèce humaine par ses hautes et constantes vertus ».

14 Malesherbes, *Mémoires sur la librairie, Mémoires sur la liberté de la presse*, présentation Roger Chartier, Imprimerie nationale, 1994, p. 249 : « Quelques ouvrages de J.-J. Rousseau ont été condamnés, et l'auteur décrété de prise-de-corps. Il a reparu depuis à Paris sans s'assurer du consentement de personne, et une sorte de pudeur a empêché de mettre le décret à exécution. Je crois qu'il n'aurait pas été fâché de subir un procès criminel, où son interrogatoire aurait été une thèse. Je l'ai connu personnellement, et tout le monde le connaît depuis qu'il s'est peint lui-même. Il se sentait le courage du martyre ; il voulait en avoir la gloire ». Pierre Grosclaude cite ce paragraphe dans son ouvrage : *J.-J. Rousseau et Malesherbes, Documents inédits*, Paris, Librairie Fischbacher, 1960, p. 115.

えている。

「殉教者」martyr(e)、「殉教」martyre という語の語源は、教会ラテン語の martyr（キリスト教の真実を証明するために拷問あるいは死を受けた人間）にあるように、第一義はキリスト教信仰を守るために苦痛や死刑を受けた人間と、その行動であり、11 世紀からフランス語に登場している。そして早い時期、『ロランの歌』*Chanson de Roland* (1180)において、非宗教的に「虐殺、凄惨な敗北」という意味でも用いられ、12 世紀にはすでに「あらゆる肉体的・精神的な大きな苦悩」として使われている[15]。フュルティエール辞典では、キリスト教信仰を守るため、異教の信仰を守るため、恋人など他人への愛のために身を犠牲にする者、その他歯痛など肉体的な苦痛を味わう者となっており[16]、愛する人間のために苦悩を強いられるという使用法が 17 世紀を経て加わっているのが分かる。さらにリトレ辞典を見ると、キリスト教のためではなく、拡大解釈した用法で、「何がしかの宗教、自らの思想、信条のために被害をこうむる者」としての「殉教者」が明記され、ディドロやヴォルテール、マシヨン Massillon、マリー＝ジョゼフ・シェニエ Marie-Joseph Chénier らが挙げられており、18 世紀から 19 世紀にかけて多く用いられたことがうかがえる[17]。

このように、18 世紀末から 19 世紀前半にかけて「殉教」という語は、もともとの古代のキリスト教徒の殉教から発展し、宗教を超えた、個人の信条や主義を貫く行為も象徴するようになり、現代に生きる我々が考える以上に、社会変革の時代において身近なひとつの文化となっていたと思われる[18]。そのひとつの現われが、殉教者の霊廟を示す martyrion(1740)に加えて、martyrium(1840)というラテン語を、殉教者の納骨堂あるいは殉教に関係した土地の上に建てられた教会を指す語として使い始めた[19]ことのように思われる。

シャトーブリアンが目指したのは、古代を隠れ蓑にした社会風刺や政府批判でもなく、動乱のなかで死んでいった者たちの「復讐」を鼓舞することでもなく、崩れ落ちたキリスト教の再建と、そこから「宗教と政治の一致[20]」を実現することであろう。しかしそれはメーストル Maistre やボナール Bonald らの説く神権的君主政とは異なる。また、アンシャン・

---

15 *Dictionnaire historique de la langue française*, sous la direction de Alain Rey, Dictionnaires le Robert, 1992, pp.1198-1199.
16 *Le Dictionnaire universel d'Antoine Furetière*(1690), SNL-le Robert, 1978.
17 *Littré, Dictionnaire de la langue française*(1863-72), tome 4, Jean-Jacques Pauvert Éditeur, 1957, p. 2068.
18 C.f. Emmanuel Fureix, *La France des larmes. Deuils politiques à l'âge romantique (1814-1840)*, Paris, Champ Vallon, 2009.
19 *Dictionnaire historique de la langue française*, *op. cit.*, p. 1199.
20 Marie-Françoise Baslez, « Autour de Chateaubriand et des *Martyrs* : réflexions sur la culture du martyre à travers les âges », in *Bulletin de la Société Chateaubriand*, nº 52, 2010, p. 69.

レジームのブルボン絶対王政も、もはやそれが時代遅れであると現実的感覚から認知しているがゆえに、社会の安定を保障するため宗教の権威を活用しようとするのがシャトーブリアンである[21]。

他方、『殉教者たち』のなかには、絶対主義王政ついで大革命を経て、完成されつつあるフランス国民意識の現われを感じさせる場面がある。それが、19 世紀の歴史家となる若き日のオーギュスタン・ティエリーに霊感を与えたフランク族の戦闘場面(*Les Martyrs*, Livre VI, pp. 201-202.)であり、ヴェレダの所属するガリア民族の反抗シーン(*Les Martyrs*, Livre X, p. 201.)である。とりわけフランク族の軍歌は野蛮だが熱気に満ちた鮮烈な印象を与えている。

« “ Pharamond ! Pharamond ! Nous avons combattu avec l’épée. […] le corbeau nageait dans le sang des morts ; […]

« “ Pharamond ! Pharamond ! Nous avons combattu avec l’épée.

« “ Nos pères sont morts dans les batailles, tous les vautours en ont gémi : nos pères les rassasiaient de carnage ! Choisissons des épouses dont le lait soit du sang, et qui remplissent de valeur le cœur de nos fils. Pharamond, le bardit est achevé, les heures de la vie s’écoulent ; nous sourions quand il faudra mourir ! ”

「ファラモン！ファラモン！われらは剣で戦った。（中略）カラスは死者の血の中を泳いでいた。（中略）

「ファラモン！ファラモン！われらは剣で戦った。

「われらの父祖は戦いで死んだ。すべてのハゲワシがその死を嘆き悲しんだ。われらの父祖はハゲワシらを生肉で堪能させた！妻たちを選ぼう！その乳が血であるような、そしてわれらの息子の心を勇気で満たすような妻を。ファラモン、歌は終わった、生きる時間は流れ去る。われらは死すべき時に微笑もう！」(*Les Martyrs*, Livre VI, pp. 201-202.)

野蛮なフランク族やガリア人のエネルギーは、洗練されてはいるがすでに退廃の時期に入ったギリシアやローマと明らかな対照を為している。年老いた社会は、新しく歴史に登場してきた蛮族の血と混じりあい、いったんカオスに戻るが、やがて再生する――こうい

[21] C.f. 竹原良文「＜正統主義＞の原理とその形成――王政復古の政治思想――」、九州大学『法政研究』43(3-4)、1977 年、265-302 頁。

った「蛮族の神話」« le mythe des Barbares »[22]をアルレット・ミッシェルは『殉教者たち』に見ている。革命後の混乱のなかから再生しようとするフランスの姿を『殉教者たち』の蛮族に重ね合わせることは可能であり、近代フランス国民の姿のルーツとして、ミシュレ Michelet の描く民衆にもつながっていくものと考えられ、ヴェレダについては、プレイアッド版『殉教者たち』校訂者であるモーリス・ルガールは「3 世紀のふくろう党の娘」« jeune Chouanne du IIIe siècle »[23]と呼んでいる。

ヴェレダは誇り高い巫女として登場しているが、地獄の悪魔たちの描写では、シャトーブリアンの革命に対する恐怖や遺憾な心情が投影されている。地獄で行われるサタンの演説の中には、下に引くように『ラ・マルセイエーズ』*La Marseillaise* の歌詞の文言が利用されていて、革命の指導者たちを皮肉っているように思われる。

> Dieux des nations, Trônes, Ardeurs, guerriers généreux, milices invincibles, race noble et indépendante, magnanimes enfants de cette forte patrie, le jour de gloire est arrivé : nous allons recueillir le fruit de notre constance et de nos combats. Depuis que j'ai brisé le joug du tyran, j'ai tâché de me rendre digne du pouvoir que vous m'avez confié.
>
> 諸国民の神々よ、＜王座＞よ、＜熱情＞よ、高邁な戦士たちよ、無敵の軍団よ、高貴かつ自立した種族、この強い祖国の高潔なる子供らよ、栄光の日が来た。我々の粘り強さと我々の闘いの成果を集めに行こう。私が暴君の頸木を打ち砕いて以来、私はお前たちが私に委ねてくれた権力にふさわしくあるように努めてきた。(*Les Martyrs*, p. 238.)

こうした『ラ・マルセイエーズ』のパロディーは、まさしく戦記物にふさわしい第六巻のフランク族の軍歌と対照をなしている。また、悪魔たちの会議に、「神に見放された人」« Les réprouvés »つまり地獄に落ちた魂たちが乱入する場面は、革命の際に乱暴で無秩序な行動に走る下層民を示唆している。

---

[22] Pour le mythe des Barbares, voir Pierre Michel, *Un mythe romantique : Les Barbares (1789-1848)*, Presse Universitaire de Lyon, 1985. En plus, Arlette Michel prolonge l'étude de Pierre Michel dans son article, « Images des Barbares dans l'œuvre de Chateaubriand : esthétique et religion », *Bulletin de l'Association Guillaume Budé*, octobre 1998, p. 174-192. Sur la renaissance de la société romaine, un autre article d'A. Michel, « Rome dans *Les Martyrs* et les *Études historiques* », *Bulletin de la Société Chateaubriand*, n° 41, 1998, p. 22-28.

[23] Maurice Regard, « Tradition et originalité dans *Les Martyrs* », *C.A.I.E.F.*, 1968, p. 79.

Aussitôt ces âmes, qui n'étaient plus gardées dans leurs bûchers, s'échappèrent des flammes, et accoururent au conseil ; elles traînaient avec elles quelque partie de leurs supplices : l'une son suaire embrasé, l'autre sa chape de plomb, celle-ci les glaçons qui pendaient à ses yeux remplis de larmes, celle-là les serpents dont elle était dévorée. Les affreux spectateurs d'un affreux sénat prennent leurs rangs dans les tribunes brûlantes. Satan lui-même effrayé appelle les spectres gardiens des ombres […].
もはや薪の山で見張られていなかったこれらの地獄に落ちた魂らは、直ちに火炎から逃れて、会議に駆け付けた。これらの魂は自分たちの責め苦のいくらかを引きずっていた。ある者は燃え上がった経帷子を、別の者は鉛でできた聖職者の祭式マントを、こちらの者は涙のたまった両目から垂れ下がっている氷片を、あちらの者は蛇に体中を貪り食われながらその蛇らを。ぞっとするような上院の、これまたぞっとする観客らが、燃え盛る演壇のなかに彼らの席を確保する。おびえたサタン自身が、黄泉の国の番人たる亡霊らを呼ぶ。(*Les Martyrs*, p. 241.)

上の下線部のように、地獄に落ちた魂たちが暴れまくる様子を前にたじろぐサタンは、最初は自らが上に立っていたはずの烏合の衆が熱狂して、いつの間にか制御不能となった革命的群集を目の前にして当惑する革命指導者の姿に通じる[24]。フランス革命の先陣を切った貴族階級と同じく、天上で輝ける天使であったルシフェルは、父なる神に反旗を翻して反乱軍の指揮者になったものの、もともと秀でた才能と精神の持ち主のサタンには、ミルトンのサタンもそうであったように、同時に堕ちた仲間たちとは埋められない溝が横たわっている。サタンは同胞のただなかにいても孤独な存在なのである。

ところで混乱の極みに至った悪魔たちの会議はどうなったであろうか？サタンは事態を収拾することかなわず、結局は神が威力を発揮して秩序を回復させるのだ。

On aurait vu peut-être un combat horrible, si Dieu qui maintient sa justice, et qui seul est auteur de l'ordre, même aux Enfers, n'eût fait cesser le tumulte. Il étendit son bras, et l'ombre de sa main se dessina sur le mur de la salle maudite. Aussitôt une terreur profonde s'empare, et des âmes perdues, et

[24] Jean Gillet, *Op.cit.*, p. 587 : « Il y a bien tout un peuple de démons dans le *Paradis perdu*, mais ils comptent peu. La réduction de leur taille, destinée à leur permettre d'entrer en nombre dans le Pandémonium, est à cet égard significative : seuls les chefs gardent leur stature. […] Ici au contraire ce caractère démoniaque du peuple, aussi bien dans les *Mémoires* que dans les *Martyrs*, donne à l'Enfer de Chateaubriand toute sa signification politique et complète le passage de l'histoire au mythe ». ジャン・ジレは、ミルトンの描く悪魔の民は、身の丈も小さく、「万魔殿」に入場可能な数も限られており、その力は取るに足らないが、シャトーブリアンの地獄の民はそれらとは全く異なると指摘している。

des Esprits rebelles : les premières retournent à leurs tourments, les seconds, après que la main divine s'est retirée, recommencent à délibérer.

たとえ地獄においても、正義を保ち、秩序を維持することができる唯一の存在である神が、この騒擾を止めさせなかったなら、おそらくすさまじい闘いを目にしたことであろう。しかし、神がその腕を広げて、その手の影が呪われた広間の壁に映った。そのとたん、極度の恐怖が一同の心をとらえた。迷える魂らは彼らの責め苦に戻り、悪魔たちは、神の手が去った後に討議を再開したのだった。(*Les Martyrs*, pp. 241-242.)

神が皆の心に吹き込んだ「極度の恐怖」« une terreur profonde »によって秩序の回復と維持が達成されるこの場面は非常に示唆的である。革命時に秩序維持のためにとられた恐怖政治が、実は神の意思から発するものであり、革命の開始も収束もすべては神の計算のもとに起こったというメーストルのような考え方であるが、シャトーブリアンの描き方には神の狡さが感じられはしないだろうか。

このように『殉教者たち』には 18 世紀末から 19 世紀初頭のシャトーブリアンが生きた時代の歴史が、第二部第 3 章で検討した「空想美術館」の効果と相まって、一種の神話の形となって入れ込まれているといえよう。

――第３節　「回心」の成就の演出

シャトーブリアンは 18 世紀に刷新された自然の観念を引継ぎ、亡命中のロンドンで執筆した『革命試論』においては、彼にとっての「自由」を、無政府主義者のようにあるいは懐疑的に躊躇しながらとはいえ、のちの作品群よりも純粋に表現していた。しかしそうした態度と訣別し、フランスに帰国するにあたってキリスト教の擁護者としての姿に変身する。『キリスト教精髄』の 1802 年の序文において、有名な彼の「回心」の様子が以下のように語られている。キリスト教信仰から遠ざかっていた彼を呼び戻したのは、母と姉の死であった。彼女たちは亡命せずフランスに残っていたため革命政府によって投獄されたのだった。

Mes sentiments religieux n'ont pas toujours été ce qu'ils sont aujourd'hui. […] je suis tombé jadis dans

les déclamations et les sophismes. Je pourrais en rejeter la faute sur ma jeunesse, sur le délire des temps, sur les sociétés que je fréquentais. Mais j'aime mieux me condamner ; je ne sais point excuser, ce qui n'est point excusable. Je dirai seulement de quel moyen la Providence s'est servie pour me rappeler à mes devoirs. […] elle(=Ma mère) chargea, en mourant, une de mes sœurs de me rappeler à cette religion dans laquelle j'avais été élevé. Ma sœur me manda le dernier vœu de ma mère : quand la lettre me parvint au-delà des mers, ma sœur elle-même n'existait plus ; elle était morte aussi des suites de son emprisonnement. Ces deux voix sorties du tombeau, cette mort qui servait d'interprète à la mort m'ont frappé. Je suis devenu chrétien. Je n'ai point cédé, j'en conviens, à de grandes lumières surnaturelles, ma conviction est sortie du cœur : j'ai pleuré, et j'ai cru.

私の宗教的感情は、昔からずっと変わらず今あるような状態ではなかった。（中略）私はかつて仰々しい演説やソフィスムに陥ってしまった。そうした過ちを、私の若さ、時代の熱狂、私がつきあっていた仲間たちのせいにしてしまうことも、その気になればできる。だが、私はむしろ自らに罪を認めよう。私は一点たりとも宥恕されざる罪を少しも弁解できない。私はただ、いかなる手段を用いて神が私を自らの義務に呼び戻したのかを述べよう。（中略）母は死に際して、私の姉のひとりに、私が育ったこの宗教に私を呼び戻すよう頼んだのだ。姉は母の最期の願いを私に知らせてきたのだが、その手紙が海を越えて私の元に届いた時には、姉自身はもうこの世の人ではなかった。彼女も投獄された結果亡くなったのだ。墓から届いたこれら二つの声、死とは何たるかを教えてくれるこの死は、私を打ちのめした。私はキリスト教徒になった。白状するが、私は超自然の偉大な光に屈したのでは少しもない。私の確信は心のなかから出てきたのだ。私は泣いた、そして信じた。(*Génie*, p. 1282.)

上の引用の下線部に注目してみよう。第二部第 2 章でも参照した、コルネイユ『ポリウクト』第五幕第五景のポーリーヌの回心の場面に似ていると同時に対照的なことが分かる。

Mon époux en mourant m'a laissé ses lumières ;
Son sang, dont tes bourreaux viennent de me couvrir,
M'a dessillé les yeux et me les vient d'ouvrir.
Je voy, je sçay, je croy, je suis désabusée,
De ce bien-heureux sang tu me vois baptisée,
Je suis chrétienne enfin, n'est-ce point assez dit?

夫は死んで、わたしに光明を残して行きました。首切り役人がわたしに浴びせかけた夫の血が、わたしの目を押しひらき、すべてを明らかにしてくれたのです。
わたしには見えます。わかります。信じます。迷いがさめたのです。わたしは、清浄な夫の血を浴びて洗礼を受けたのです。わたしもついに、キリスト教徒になったのです。これだけ言っても足りませんか？[25]

『精髄』の筆者と『ポリウクト』のポーリーヌはともに、親しい家族や愛する人の死が契機となり、もともと信者であるにもかかわらず蔑ろにしていた信仰を取戻した、あるいは拒んでいた宗教を信じるようになったという点で、表現形式[26]以外に内容としても共通性がある。しかしながら、コルネイユのポーリーヌには、夫であるポリウクトを通して神の啓示の「光」が届くのとは異なり、シャトーブリアンの場合は、フランス帰国許可を獲得するためのキリスト教擁護者としてのパフォーマンス性を認めた上で言うならば、キリスト教への回帰の理由は、「超自然の偉大な光に屈したのでは少しもなく」« Je n'ai point cédé à de grandes lumières surnaturelles » とあるとおり、神の啓示の光に目覚めたのではなく、革命さなかの危険な祖国に留まったために、ある意味で亡命したシャトーブリアンの身代わりに死んでいった母と姉に向けての彼自身の謝罪と鎮魂の願いであるように感じられる。それが「私の確信は心のなかから出てきた」« ma conviction est sortie du cœur »と表現されているのである。つまり、『精髄』における青年シャトーブリアンの回心の動機は、神の啓示ではなく、彼自身から発した償いの欲求である。

一方、『殉教者たち』の主人公ウドールは、青年シャトーブリアンが旅人であったのと同じように、その物語も二度の回心とそれにともなう居所の変遷から構成される、いわば「出発・新しい場所の発見・帰還」という典型的な旅の物語である。いくつもの土地の移動があるが、そのなかで大きな動線を取り出してみよう。

まず、人質として故郷のギリシアを旅立ち（出発１）ローマに来たウドールは、放蕩にあけくれ（発見１）破門される。宮廷での折り合いが悪くなり追放され（出発２）ローマ

---

[25] Corneille, *Polyeucte, tragédie, nouvelle édition*, par J.Favre, Paris, Garnier Frères, 1880, p. 153. 『ポリュークト』岩瀬孝訳『コルネイユ名作集』所収、白水社、1975 年、288 頁。
[26] シャトーブリアンの『最後のアバンセラージュ族の冒険』にも、『ポリウクト』を手本にしたと思われる主人公とヒロインの問答がある。*Abencérage*, p. 491 : « Je t'aimerois, répondit le Maure, plus que la gloire et moins que l'honneur ». Cf. *Polyeucte*, éd. par J. Favre, p. 126 (Acte IV, Sc. 3) : « Je vous aime, / Beaucoup moins que mon Dieu, mais bien plus que moy-mesme ».

軍の兵として派遣されたバタヴィアでフランク族の捕虜となり（発見２）、同じ奴隷仲間のザッカリーとの交流のなかで信仰を回復、第一回目の回心が行われる。そのあと使者に立てられ（出発３）ローマ軍に戻され、すぐさまブルターニュへと異動となる（発見３）。そこで異教徒ヴェレダと出会い、色恋沙汰で彼女を死に追いやってしまい、第二回目の回心にあたる悔悛が行われる。軍を辞して（出発４）地中海を経巡った（発見４）のち、ウドールはギリシアへ帰還する（帰還１）。このあと、ウドールはシモドセと出会い、キリスト教迫害開始の気運とともにギリシアから（出発５）ローマに召喚され（帰還２）、キリスト教徒たちの代表者・指導者となっていく。つまり、『殉教者たち』の物語のなかには、ギリシアへとローマへと、二つの帰還が描かれている。ギリシアへは、一人の青年が被征服者として奪われてしまっていた故郷へ帰還するのであり、ローマへは、かつて同地で破門され信仰を失った者が、回心したうえに、さらにキリスト教徒の指導者として成長して帰還するのである。

こうしたウドールのライン河流域やブルターニュ、さらに地中海周遊の旅は、フェヌロンの『テレマック』同様、主人公の人間的成長物語の体裁を備えている。しかし、皮肉にも、情念の発露の表現こそがシャトーブリアンの真骨頂であるのに、ウドールが人間らしい「自由」な感情で行動するのは、小説版がもとになっている前半部分の第四巻から第十一巻（ウドール自身による冒険の語り聞かせ）の部分であって、後半に入り、迫害されるキリスト教徒の指導者として成長するにつれて、自らの感情を抑制するようになる。これは、ヴェレダの死の場面まで書かれていた小説を、個人の物語よりもひとつの集団の歴史を物語る性格の強い叙事詩に変えるため、悲劇の後にウドールが回心し成長していく有り様を書き足した結果であるといえよう。

『殉教者たち』の世界では、堕天使ルシフェル（サタン）が地獄を支配し、嫉妬や騒乱を人間たちに働きかける。一見したところ、天上の神と対決しているようでいて、実は彼らの悪巧みは、ウドールとシモドセの殉教という天が定めた運命が成就するための過程のひとつの仕掛けにしかなっていない。こうした天上の神の狡猾さとも言うべきものは、ミルトンの『失楽園』よりも明確に感じられるほどである。ルシフェルやその部下の堕天使らは、神の摂理が定める、彼らが本来果たすべきであった義務を放棄した者であり、かつて自らも所属していた天上の世界に反抗し続けるが、結局は敗北を繰り返す運命なのだ。彼らは回心することなく、前節で指摘したように、とりわけサタンは苦悩を味わい続ける存在として描かれている。シャトーブリアンにとっては、万物の父なる神、神に代わって

地上における父権を担う王家、そして王権の下で父祖たちが築き上げた祖国の伝統、それらへの反抗ののちに、懺悔してそこへ戻ってくる「回心」という行為がきわめて重要だったと考えられる。祖国が危機に瀕していれば、なおさら、現在を生きる自分が未来へつないでいかねばならないという意思が、『キリスト教精髄』に描かれたフランソワ＝ルネと『殉教者たち』のウドールの回心に感じられるのだ。しかし、だからといって、祖国や伝統のために完全なる自己犠牲に徹することが、「個の自由」に敏感なシャトーブリアンに可能であったであろうか？その答えは、シャトーブリアンの他の作品におのずと現れてくるはずである。

――第４節　個の自由の希求と祖国愛との狭間で

シャトーブリアンのほかの小説や伝記にも、異教や無信仰からの回心はもちろん、放蕩や無気力な生活からの改悛（改心）など、さまざまな状況下での conversion「回心」の場面が描かれているが、そのなかでとりわけ重要に思われるのは、真剣な恋愛感情ゆえに生じた、本来従うべきである帰属集団の義務や掟からの離脱状態である。そこには、過去からの遺産・伝統を保持したいという意思や父祖への敬愛からなる子としての義務感と、ひとりの人間としての自然な感情との間の葛藤が現れているからである。それは、聖アウグスティヌスの『告白』における、「神を徐々に発見していく中で得られる魂の平安」に焦がれる気持ち[27]と、現世のさまざまな欲望への執着との間の葛藤とは、少し様相が異なるものだ。それでは、具体的にそれぞれの回心の場面を検討してみることにしよう。

まず、『アタラ』では、アタラは恋の熱情にとらわれたさなかに、雷鳴と落雷とで、母親が彼女に定めた「天使の女王様への捧げ物[28]」としての役割を思い出し、シャクタスとの恋

---

[27] Phippe Sellier, *Pascal et saint Augustin*, Albin Michel, 1995, p. 36 : « Toute l'aventure spirituelle racontée dans les *Confessions* consiste dans l'épuisement et le dégoût produits par la fugacité des choses sensibles et la découverte progressive de Dieu comme repos pour l'âme ». Cf. Fabienne Bercegol, *Chateaubriand : une poétique de la tentation*, Classiques Garnier, 2009, p. 475 : シャトーブリアンは聖アウグスティヌスの『告白』で語られる二つのテーマのうち、「神の恩寵を受けての感激」« le lyrisme de la grâce »ではなく「現世に対する幻滅」« le thème du désenchantement du monde »のテーマを引き継いでいる。

[28] *Atala*, p. 132 : « Pour sauver mes jours, ma mère fit un vœu : elle promit à la Reine des Anges que je lui consacrerois ma virginité, si j'échappois à la mort ».

を思いとどまる。母の立てた誓願を破ってしまうことになると悩んだアタラは毒をあおって死ぬ。アタラは瀕死の状態でシャクタスとオーブリー神父に自らの逡巡を打ち明ける。

Te sollicitant à la fuite, et pourtant certaine de mourir si tu t'éloignois de moi ; craignant de fuir avec toi dans les déserts, et cependant haletant après l'ombrage des bois... Ah ! s'il n'avoit fallu que quittter parents, amis, patrie ; si même (chose affreuse) il n'y eût eu que la perte de mon âme ! ... Mais ton ombre, ô ma mère, ton ombre étoit toujours là, me reprochant ses tourments ! J'entendois tes plaintes, je voyois les flammes de l'enfer te consumer.

あなたに逃げるように言っておきながら、もしあなたが私から遠くへ去っていくなら私はきっと死んでしまったに違いないのでした。あなたと一緒に逃げるのは恐ろしかった、けれども暗い森の中へ行きたくてたまりませんでした。ああ！もしも身寄りや、友達や、国を失うだけなら、もし（恐ろしいことではあるけれど）私の魂を失いさえすればよいのであったなら…でも、ああ、お母さん、あなたの影が始終そばにいて、この苦しみが私のせいだといって責めたのです。私はあなたの嘆きを聞き、地獄の業火があなたを焼き尽くすのを見たのです！(*Atala*, p. 135.)

キリスト教で自殺が禁じられていることを知らないアタラの自殺の決断は、「もしも身寄りや、友達や、国を失うだけなら」、「私の魂を失いさえすればよいのであったなら」とあるように、何にもまして母の遺言を尊重しようとした、つまり先祖の命令に敬意を払った結果だが、シャクタスは憤然とキリスト教の神を非難して叫ぶのだ。

Périsse le serment qui m'enlève Atala ! Périsse le Dieu qui contrarie la nature !

私からアタラを奪うような誓いなどなくなってしまえ！自然に逆らうような神は消えてしまえ！(*Atala*, p. 134.)

人間の心の底から湧き上がる情＝「自然」を規則で縛るべきではないというシャトーブリアンの反抗心の表れであろう。また、オーブリー神父もシャクタスの激昂をたしなめつつ、娘を神に捧げるというアタラの母親の立てた誓願はそもそも誤った信仰から出ており、手つづきをきちんとふめば解消できるのであって、キリスト教の神は慈悲深く、人間たち

に無理強いして彼らの幸福を犠牲にさせるようなことはしない、と説く[29]。つまりアタラは、誓いを破れば呪われると臨終で娘に脅しをかけた母親の思い込みの犠牲になったのだ。シャトーブリアンはキリスト教信仰に殉じた少女として、一見 18 世紀に認識され始めた「善き死[30]」の一例としてのアタラの死を描いているようでいて、実は誤った信仰を子孫におしつけた先祖に抗議しているようにも思える。実際、アタラは、自ら選択した死を前にしてなお、シャクタスとの恋への未練を持ち続けており、「官能のとりこ[31]」になっている。

さらに、シャトーブリアンは 18 世紀の「善良なる未開人」Bon Sauvage のテーマを引き継ぎ、インディアンであると同時にルイ 14 世の宮廷を訪れ、二つの文明の仲介者たる資質を備えたシャクタスを主人公の一人として描きながらも、『アタラ』、『ナチェーズ族』で未開人の部族同士や、土着の部族民対ヨーロッパからの植民者の悲惨な闘争、現地民の滅亡という過酷な運命を描き、彼の先祖らが作り上げていた幻想を打ち砕いたといえる。

また、ヨーロッパの修道会による、インディアンの自主性を尊重した布教活動を行う姿を描くことで、シャトーブリアンが西欧の伝道活動にオマージュを捧げていると思われる人物、オーブリー神父は、この世の生の喜びを認め、人間の善なる本性を信じ、現世の人間の情念と信仰の調和を主張する一方で、アタラが毒を飲んだためにもう助からぬと知ったとたん、その説教は全く別の方向へと向かうのだ。『ポールとヴィルジニー』でポールを慰める隠者と同様、この世のはかなさや人間の心の変わりやすさを説いて慰め、アタラに死出の心の準備をさせるのである[32]。オーブリー神父のこの二面性は、『アタラ』校訂者フ

---

29 *Atala*, p. 136 : « La religion n'exige point de sacrifice plus qu'humain. Ses sentiments vrais, ses vertus tempérées sont bien au-dessus des sentiments exaltés et des vertus forcées d'un prétendu héroïsme ».

30 「美しい死」と「善き死」は、18 世紀に区別され始めていた。Robert Favre, *La Mort dans la littérature et la pensée françaises au siècle des Lumières*, Presses Universitaires de Lyon, 1978, pp. 128-129 : « La ‹ belle mort qui ne consiste, pour l'ordinaire, que dans cet éclat extérieur de religion et de piété › n'empêche pas les pécheurs de ‹ tomber de leur lit dans les profonds abîmes de l'enfer ›. La ‹ bonne mort › au contraire, suppose l'état de grâce, quand bien même on succomberait ‹ de mort subite, sans sacrements, et abandonné de tout le monde, comme sont morts quantité de saints›».「通常、そうした信心や宗教心の外面的な華やかさの中にしかない美しい死は、罪びとがその死の床から地獄の渕へ落ちるのを妨げるものでない。反対に善き死は、たとえ秘跡を授からず、また多くの聖者のように誰からも見棄てられて突然に死んでも、恩寵に浴する状態が想定されている。」

31 ローラン・モルティエはジュリー、ヴィルジニー、アタラの 3 人のヒロインの死を比較し、ヴィルジニーが最も宗教的な霊性に適合しているのに対して、アタラは官能のとりこになっていると評している。Roland Mortier, « Julie, Virginie, Atala, ou la mort angélique », dans *Le Cœur et la Raison*, Voltaire foundation, Université de Bruxelles, 1990, p. 503 (pp. 492-503) : « […] la finalité de la mort angélique d'une jeune femme conditionne ces œuvres situées dans des contextes si différents. A cet égard, le destin de Virginie est sans doute le plus parfaitement conforme au modèle spiritualiste, puisque Julie se veut théologienne et raisonneuse, alors qu'Atala (en innocente sauvageonne) est en proie à une puissante sensualité ».

32 *Atala*, pp. 139-142 : « Quant à la vie, si le moment est arrivé de vous endormir dans la Seigneur, […]que vous perdez peu de choses, en perdant ce monde ! » (p. 139.) / « L'amour n'étend point son

ァビエンヌ・ベルスゴルによれば、寛容を説き、情念と信仰の調和の可能性を信じるフェヌロンの考えと、現世の空しさと人間の悲惨さを説くパスカル Pascal やボシュエ Bossuet の主張とを結びなおしていることから来ている[33]。この作中人物の両義性は、そのままシャトーブリアンのキリスト教観、あるいは人生観をも表しているといえよう。

次に、『ルネ』における姉アメリーの出家の際の請願を考えよう。思いがけず姉の告白を耳にしてしまったルネは衝撃を受ける(*René*, p. 418)。ルネは、それまで無邪気に姉を慕っていたのだが、姉アメリーのほうは、弟に道ならぬ恋心を感じていたにもかかわらず、必死に抑制して姉としての毅然とした態度や節度を保っていた。しかし、そうした努力にも限界を感じてアメリーは修道女となる決意をしたことが明らかになる[34]。近親相姦という禁忌を犯すことを未然に防ぐため、姉アメリーは自ら進んで神へすべてを捧げることにしたのだが、もし弟への恋心を「自然な感情」とみなすならば、この場合も伝統・慣習と自然な情念の対立と考えられないこともない。修道院のなかで、傍目には、いつも穏やかな気持ちを持って仲間に接する「聖女」のように見られていたアメリーではあるが、以下に挙げるルネへの最後の手紙の文言のなかに、情熱の熾火を感じ取れはしないであろうか。

> c'est ici que la religion trompe doucement une âme sensible : aux plus violentes amours elle substitue une sorte de chasteté brûlante où l'amante et la vierge sont unies ; […] elle mêle divinement son calme et son innocence à ce reste de trouble et de volupté d'un cœur qui cherche à se reposer, et d'une vie qui se retire.
>
> こここそは宗教が感じやすい魂を優しく欺いてくれるところです。どれほど激しい愛であろうと、恋する女と処女とがひとつになった燃えたつ純潔のようなものに置き換えてくれるのです。（中略）宗教は、憩いを求める心や隠遁生活にもなお残る心の乱れや官能への欲求に対して、神々しいまでに平穏と無垢とを混ぜ合わせるのです。(*René*, p. 421.)

---

empire sur les vers du cercueil. Que dis-je ? (ô vanité des vanités !) que parlé-je de la puissance des amitiés de la terre ? » (p. 142.)

33 *Atala*, « Présentation », pp. 42-43.

34 回心の方法のヴァリエーションのひとつとして、アメリーの修道院入りという決心は、『殉教者たち』でウドールがエジプト・テーベ近郊テバイッドで出会う独居修士・聖アントワーヌの生き方、そして『ランセ伝』主人公との共通性が認められる。（Cf. Fabienne Bercegol, « L'expérience de la conversion dans l'œuvre de Chateaubriand », in *Le IVe congrès de la SERD(Société des études romantiques et dix-neuviémistes) : Les Religions du XIXe siècle* (26-28 novembre 2009), mise en ligne septembre 2011, p.7.）

アメリーの手紙の趣旨は、修道院にいることでいかに心は穏やかになり、幸せでいられるかと弟に伝えようとするものでありながら、宗教が「感じやすい魂」を「欺いてくれる」、世を捨てた生活にあって「なお残る心の乱れや官能への欲求」といった、ちりばめられたひとつひとつの言葉からは、ちらちらと燃え続けている情念を感じることができるのだ。

一方、弟のルネの状況はアメリーよりも深刻である。アメリーの苦悩はその原因が明確であり、禁忌を犯す前に、修道院に入ってルネから隔絶してしまうという物理的な対策をとることができる。修道院にいても完全には情念を消し去ることはできないものの、彼女が最も恐れている「罪深い情念」« ma criminelle passion » (*René*, p. 418)が引き起こす「嵐から逃れる避難所[35]」をみつけている。それに対して、「異国の地にいたときよりも、祖国にいるほうがいっそう孤立している」と感じるルネは、情熱をかけて「魂を傾けることのできる対象（＝愛する人）」を求めても、ただ、己の優越性を確認するばかりで、孤独になっていくのである[36]。こうした姿は孤独なサタンにも重なって見える。この世の「限界」あるものに価値を見いだせない彼は、何を欲しているか自分でも分からないでいる[37]。こうして「自らの存在の深淵を満たしてくれる何か」« quelque chose pour remplir l'abîme de mon existence » (*René*, p. 406)を欠いていたルネは、姉の告白を聞いたことで、むしろ具体的な苦悩、情念を注ぐ明確な対象を見出すことができるようになって、悲しみの中に喜びさえ感じるのである[38]。だが、ルネは、新大陸に渡りインディアンの部族に帰化してからも、憂鬱で不安を抱えたままであり、最後まで救われることはない。アメリカの豊かな大自然のなかで未開人と共に暮らし、賢者シャクタスとスーエル神父という相談役、現地民の気立ての良い妻セリュタを得ても、なおルネは癒されない。『ルネ』は、各所で聖アウグスティヌスの『告白』から苦悩やメランコリーを引き写しているが、古代の聖人のように神の恩寵を受けて「回心」し救われることはないのだ。さらには、文学の伝統に対するとどめとし

---

35 *René*, p. 421 : « Quand j'entends gronder les orages, […] je songe au bonheur que j'ai eu de trouver un abri contre la tempête ».

36 *René*, p. 403 : «Je me trouvai bientôt plus isolé dans ma patrie que je ne l'avois été sur une terre étrangère. […] Mon âme, qu'aucune passion n'avoit encore usée, cherchoit un objet qui pût l'attacher ; mais je m'aperçus que je donnois plus que je ne recevois ».

37 *René*, p. 405 : « Je me mis à sonder mon cœur, à me demander ce que je désirois. Je ne le savois pas. […] Est-ce ma faute, si je trouve partout les bornes, si ce qui est fini n'a pour moi aucune valeur ? »

38 *René*, p. 419 : « Mes passions, si longtemps indéterminées, se précipitèrent sur cette première proie avec fureur. Je trouvai même une sorte de satisfaction inattendue dans la plénitude de mon chagrin, et je m'aperçus, avec un secret mouvement de joie, que la douleur n'est pas une affection qu'on épuise comme le plaisir ».

て、『ナチェーズ族』において妻に横恋慕している同じ部族の男に惨殺されることでも、「善良なる未開人」の伝説は完全に否定されているといえよう。

また、『アタラ』・『ルネ』・『ナチェーズ族』を通じてその青年期と老年期が描かれているシャクタスは、瀕死のアタラに向かってキリスト教への改宗を約束するが(*Atala*, p. 145)、すぐには実行されず、老シャクタスの死の直前にまで引き延ばされる。しかも、その「回心」は以下に見るように曖昧な形でしかないのだ。

> Chactas était assis et appuyé contre le tronc du tulipier ; la brise se jouait dans sa chevelure blanchie, et le reflet des roses de l'aurore colorait son front pâlissant. Faisant un dernier éffort, le Sachem tira de son sein un crucifix que lui avait donné Fénelon. « Atala, dit-il, d'une voix ranimée, que je meure dans ta religion ! que j'accomplisse ma promesse au père Aubry ! Je n'ai point été purifié par l'eau sainte ; mais je demande au Ciel le baptême de désir. […] elle (=la mort) n'aura point à clore mes paupières, comme celles des autres hommes : je vais au contraire ouvrir à la clarté divine des yeux fermés depuis longtemps à la lumière terrestre. » Chactas exhala la vertu avec son dernier soupir : l'arbre parfumé des forêts américaines embaume l'air quand le temps ou l'orage l'ont renversé sur son sol natal.
>
> シャクタスはユリノキの幹にもたれかかって座っていた。そよ風が彼の白くなった髪を撫で、曙の光の織り成すバラが蒼白な顔を色づかせていた。長老は最後の努力をして、かつてフェヌロンが彼に与えたキリスト磔刑像のついた十字架を胸元から取り出した。シャクタスは生気を取り戻した声でこう言う、「アタラよ、そなたの宗教のなかで死ねますように！オーブリー神父にした約束を果たすことができますように！私は聖水によって清められることはなかった。だが、天に我が思いによっての洗礼をお願いするのだ。（中略）死は、他の人間たちにするように私の瞼を閉じる必要はまったくない。それとは反対に、私は長い間地上の光に対して閉じていた目を、神の光に開くことになるのだから。」シャクタスの最後の息とともに全身からは徳が拡がっていった。アメリカの森のなかの芳香を放つ木は、時間あるいは嵐がその木を生まれた土地から引き倒した時に、大気を良い香りで満たすのである。(*Les Natchez*, pp. 443-444.)

賢者シャクタスの毅然とした態度や、臨終の際の周囲の芳しい自然を描写することで、シャトーブリアンは、シャクタスがキリスト教徒となって天国でアタラと一緒になれるように演出したように思われる。しかし「聖水による洗礼」は受けずじまいであり、あくま

でシャクタス自身の「思い」の深さを頼みにして天に直談判するかのような洗礼であること、同胞のインディアンとの連帯を大切にして死の直前まで改宗を遅らせたこと、また『アタラ』エピローグにおいては、ルネの孫娘にあたるインディアンの女性が、偶然出会ったヨーロッパ人の話者に、シャクタスは「洗礼を受けました[39]」と教えてはいるが、詳しい様子は語られていない点を考え合わせると、シャクタスのインディアン土着の宗教からキリスト教への改宗が成就したかどうかは不確実性が残ると言わざるをえない。

このように、シャトーブリアンの文学フィクション作品において、とりわけ『アタラ』・『ルネ』には『キリスト教精髄』に挿入されたエピソードとして、キリスト教信仰の素晴らしさを例証する役割が充てられてさえいるが、シャトーブリアンの分身たる作中人物らの「回心」の成就は為されないか、達成されてもどこか不明瞭さがつきまとっている。

さらに、1809 年の『殉教者たち』と 1811 年の『パリ＝エルサレム紀行』と同時期に執筆されていた歴史小説『最後のアバンセラージュ族の冒険』(1826)では、モールの末裔アベン＝アメットは、ひと目で恋に落ちたスペイン人女性ブランカと一緒になるため、そしてフランス人騎士ロートレックのキリスト教徒としての高潔な態度に感嘆して、一旦はキリスト教の神へ祈りを捧げようとする。しかし先祖の恨みと子孫としての義務を思い出して我に返るのだ。

> Aben-Hamet alloit se précipiter sur le marbre, lorsqu'il aperçut, à la lueur d'une lampe, des caractères arabes et un verset du Coran, qui paroissoient sous un plâtre à demi tombé. Les remords rentrent dans son cœur, et il se hâte de quitter l'édifice où il a pensé devenir infidèle à sa religion et à sa patrie.
> アベン＝アメットがいまにも（かつてはモスクであったが今はキリスト教会の）大理石の床に平伏そうとしたとき、ランプの光で、半ば崩れた石膏の下にアラビア文字とコーランの一節が見えているのに気付いた。自責の念が心に戻ってきて、自らの宗教と祖国に不忠なる者になろうと考えた当の場所であるその建造物から急いで離れた。(*Abencérage*, p. 505.)

アベン＝アメットは、この後さらに悩んだ末、先祖への敬意と、現在生きている自分の存在意義・アイデンティティーを守るために、キリスト教徒との恋をあきらめ、グラナダを去り砂漠へと戻っていく。このアベン＝アメットの決心、アタラの死の選択の理由、そ

[39] *Atala*, p. 162 : « Chactas, qui avoit reçu le baptême, et René mon aïeul si malheureux, ont péri dans le massacre ».

してシャクタスの改宗の躊躇と延期を見ると、シャトーブリアンにとって第一に重要なのはキリスト教の神との関係ではなく、父祖との関係に思われる。そして父祖への敬愛は祖国愛に直結している。『キリスト教精髄』において、人間が各々の生まれ故郷をいとおしむ心、祖国愛は、神の配慮によって与えられたという主張を展開しているとおり[40]、シャトーブリアンにあっては、祖国と宗教は不可分なのである。だからこそ、シャクタスを、彼が父祖から受け継いだインディアンの宗教から簡単に離脱させるわけにはいかないのである。これらの人物と比較して、神から見放され、自分から祖国も捨てたルネは、シャトーブリアンの描いた人物のなかで際立つ存在である。宗教も、家族も、祖国も、彼を繋ぎ止めようとするあらゆる鎖を、自我の命ずるままに断ち切ろうとする点で、彼はもっとも自由で革新的であると同時にもっとも孤独である。

このようにみてくると、前節でとりあげた、『精髄』の序文におけるフランソワ＝ルネの劇的な回心と『殉教者たち』のウドールの回心と成長とは、シャトーブリアン作品群において、『ルネ』の自己破壊的な主人公の対極にあり、また回心の成就という点でもむしろ特殊であることが分かってくるのだ。

シャトーブリアンの人生には、変革の時代ゆえに常に死が取り巻いていた。彼は、『革命試論』の 1826 年版での注で、ルイ 16 世のような王族の死と、自分の兄やいとこのアルマンのような、歴史において無名の人間の死とを並置してこう語る。

> Certainement pour l'homme *qui meurt*, qu'il soit roi ou sujet, la mort est absolument la même chose ; mais, pour les hommes qui vivent, la mort d'un roi puissant est d'une toute autre importance que la mort d'un sujet obscur. La tête de Louis XVI, en tombant, a fait tomber la tête de plusieurs millions d'hommes. Et qu'importe à la France que la tête de mon frère ait roulé sur l'échafaud ou que celle de mon cousin, Armand de Chateaubriand, ait été percée d'une balle dans la plaine de Grenelle ?
>
> 確かに、*死にゆく*人間にとっては、それが王であろうと臣下であろうと、死は絶対に同一のものである。しかし、生きている人間にとっては、力のある王の死は、名もない臣下の死とはまるっきり別の重大性がある。ルイ 16 世の首が落ちて、幾千もの人々の首が落とされたのだ。だが、フランスにおいて、我が兄の首が死刑台の上で転がったからといって、また、我がいとこアルマン・ド・シャトーブリアンの首が、グルネルの野で銃弾に貫かれたからとい

[40] *Génie*, 1e partie, livre V, chapitre 14, « Instinct de la patrie », pp. 595-601.

って、何になる？(イタリック体強調は原著者による。*Essai sur les révolutions*, p. 947.)

シャトーブリアンにとって、思考・感情、そして行動の「自由」は、旧体制下であろうと革命後であろうと、ひとりの人間にとって基本的なものであり、常に欲し続けたものであった。しかし、それをめぐる闘争はあまりに血なまぐさかった。無名の一青年を主人公にした『殉教者たち』は、作者にとって、兄やマルゼルブを含め、革命で死んでいったすべての人々への鎮魂歌ではなかったのか。動乱を生き残ったシャトーブリアンは、革命の犠牲者たちのことを、フランスが新しい社会へと再生するための殉教者として考え、この作品をオマージュとしてささげたのではないか。彼自身にとっても、これで喪の作業の一区切りがついたかのように、この叙事詩をもって、シャトーブリアンは作家としての筆をしばらく擱くことになるのであるから。

第２章　ルイ 14 世の世紀に対する批判によって示されるものは何か？
――『フランス史の理論的分析』(1831)と『ランセ伝』(1844)を中心に――

――第１節　絶対王政と革命

シャトーブリアンはナポレオン帝政期、復古王政期を通じて、ブルボン正統王朝支持派として知られている。しかし、当時の極右派を代表していた人物たち、例えば、絶対君主制を保護するボナール(1754-1840)、教皇権至上主義 ultramontanisme を主張するジョゼフ・ド・メーストル Joseph de Maistre (1753-1821)、ラムネ Hugus Félicité Robert de Lamennais (1782-1854)[41]らとは一線を画しておかねばならない。

メーストルは、大きな歴史の流れを円環状の運動と捉え、どのような途中経過を辿ろうとも、革命を経たのち、最終的には世界はキリスト教に基づく原初の場所に回帰すると考えており、シャトーブリアンは 1836 年の『イギリス文学試論』の結論では、「未来は、福

[41] ラムネは七月革命の後は自由主義思想の傾向を強め、カトリック教会の権威主義を告発、教皇と対立し破門されるに至る。以後はキリスト教社会主義を説くことになる。

音書的な平等の完全なる充溢の中で、力強く、自由なものとなろう[42]」とメーストルに強く惹かれていることをにじませる。しかし、シャトーブリアンは、ルイ 18 世による王政復古の時点で目的が達成されたと考える反革命派の人間たちほど楽観的ではない。大革命を単に政治的な駆け引きの結果ではなく、社会的な変動現象と見る彼は、より悲観的で、時として自由主義や共和主義に近い面すら見せることがあり、メーストルらの描く「未来」像を否定することになる。

シャトーブリアンが盲目的な王党派ではないことは、ルイ 14 世による絶対王政期を『フランス史の理論的分析』*Analyse raisonnée de l'histoire de France* (1831) において明確に非難していることからも分かる。とくに強烈な表現を用いている２箇所を挙げてみよう。

> Louis XIV, devenu majeur, entra au parlement avec un fouet, sceptre et symbole de la monarchie absolue ; et les Français furent mis à l'attache pour cent cinquante ans.
> 成年となったルイ 14 世は、絶対君主制の王杖かつ象徴たる鞭を持って高等法院に入場した。そしてフランス人は 150 年もの間、鎖につながれたのだった。(*Analyse raisonnée de l'histoire de France*, p. 477.)

> Le siècle de Louis XIV fut le superbe catafalque de nos libertés, éclairé par mille flambeaux de la gloire, que tenait alentour un cortège de grands hommes.
> ルイ 14 世の世紀は、我々の自由の見事な棺台だった。夥しい数の栄光の松明に照らされ、周囲には偉人たちの葬送の列が続いていた。(*Analyse raisonnée de l'histoire de France*, p. 481.)

こうしたシャトーブリアンの歴史分析のテクストを読む際には、個々の歴史事実の記述については正確性を欠いている点を考慮しておくべきである。例えば、「成年となったルイ 14 世は（中略）高等法院に入場した」という文に関しては、少々説明を加えねばならない。ルイ 14 世は 5 歳で即位、国王成人年齢である 14 歳になった際に太后アンヌ・ドートリッシュの摂政が解かれたものの、実権は依然宰相マザランの手元にあった。ルイ 14 世が親政

[42] *Essai sur la littérature anglaise* ; *Œuvres complètes*, (Garnier frères, 1861), Nendeln/Liechtenstein, Kraus Reprint, 1975, t. XI, p. 792 : « Un avenir sera, un avenir puissant, libre dans toute la plénitude de l'égalité évangélique ; mais il est loin encore, […] Avant de toucher au but, avant d'atteindre l'unité des peuples, la démocratie naturelle, il faudra traverser la décomposition sociale, temps d'anarchie, de sang peut-être, d'infirmités certainement : cette décomposition est commencée ; elle n'est pas prête à reproduire de ses germes, non encore assez fermentés, le monde nouveau ».

を開始するのはマザランの死後 1661 年、22 歳になってからであり、「成年」に達して直後ではなかった。ただ、1655 年 3 月、高等法院に昂然と乗り込んで、それまでの操り人形の王様のイメージを払拭したエピソードは事実で、16 歳の頃であった。

そもそもシャトーブリアンの歴史分析のテクストは、今日の我々にとっての歴史学の範疇には当てはまらない。彼のテクストは、「歴史の世紀」と呼ばれる 19 世紀の出発点として、ロマン主義歴史叙述の源としては認められながらも、ギゾーGuizot やミシュレらによって確立されていった「歴史学」に数えられることはなかった。自らがその中に生きてきた「歴史」をいかに叙述するかを常に探求し続けたシャトーブリアンの文章は、歴史叙述と文学あるいは物語との中間にある。したがって、個々の事実の正確さよりも、テクスト全体として、シャトーブリアンが諸々の歴史的事実の内奥に横たわる、歴史の本質についていかなる夢想を行っているか、を読み解くことこそが我々にとって重要なのである。

シャトーブリアンにとって、ルイ 14 世の世紀は、社会全体の雰囲気としては栄光に輝いていながら、フランス国民の各個人としては自由を奪われ隷属状態が開始した瞬間であった。そもそもフランスは、貴族対王権の血みどろの抗争を経て、絶対王政を確立した経緯がある。シャトーブリアンの政治的理想は、正統王朝を戴く自立性を備えた貴族政治であり、イギリス型の立憲君主制であった[43]。それは以下に挙げた、イギリスとフランス各々がたどった政治形態の変革の経過の象徴的な対比表現に現れている。

> La monarchie des états avait commencé en France et en Angleterre presque au même moment dans les siècles barbares ; elle aboutit presque au même moment dans le dix-septième siècle, en Angleterre, à la monarchie représentative ; en France, à la monarchie absolue. La réforme religieuse que tenta Henri VIII réussit, et la réforme religieuse qu'essayèrent les huguenots avorta : de cette différence de fortune dans la vérité religieuse naquit peut-être la différence de position dans la vérité politique. Les guerres parlementaires de la Grande-Bretagne furent les dernières convulsions de l'arbitraire anglais expirant ; les guerres de la Fronde, les derniers efforts de l'indépendance française mourante. L'Angleterre passa à la liberté avec un front sévère ; la France, au despotisme, en riant.
>
> 身分制議会による君主制は、野蛮な諸世紀の間に既にイングランドとフランスでほぼ同時期に始まっていたが、これまた 17 世紀の同じ時期に、イングランドでは代議制議会による君主

[43] *Essai sur les révolutions*, p. 1179, note de la nouvelle édition (1826) : « j'ai toujours préféré par raison, et je préférerai toujours la liberté dans le mode de la monarchie représentative ».

制に至ったのに対し、フランスでは絶対君主制に行き着いたのだった。ヘンリー８世が企てた宗教改革は成功し、ユグノーらの試みた宗教改革は頓挫した。こうした、信教に関する現実における経過の違いから、きっと政治的現実における状況の違いが生まれたのだ。大ブリテン島の議会の戦いは、瀕死のイングランドの独裁の最後の痙攣であった。一方、フロンドの乱の戦いは死にかけたフランス的独立心の最後の努力であった。イングランドは厳しい表情をして自由へと移行し、フランスは笑いながら専制主義へと移行したのだ。(*Analyse raisonnée de l'histoire de France*, p. 477.)

イギリス議会制の勝利は「瀕死のイングランドの独裁の最後の痙攣」、フランス王政の中央集権化の途上での内乱は「死にかけたフランス的独立心の最後の努力」と対比表現されている。しかも、「笑いながら専制主義へと移行した」という一文がシャトーブリアンのこの時代に対する見方を見事に要約している。

また、シャトーブリアンの歴史の連続性を重視する傾向を示していて興味深いのは、フランス革命以降 19 世紀の歴史の主役となった民主主義と民衆の起源は、ルイ 14 世の時代にあると説明している点である。大革命を歴史の断絶と考えるのではなく、むしろその前後の連続性を重視する、彼の「ヨーロッパは民主主義へと突き進んでいる[44]」という歴史認識は、すでに指摘されてきたように、アレクシス・ド・トクヴィル Alexis de Tocqueville (1805-1859)との共通性をそこに見出だすことができよう。なお、当時は近代歴史学の揺籃期であるため、今日使われる意味での歴史家はいまだ存在しておらず、あえて広く歴史に関する著述を行う作家や思想家を「歴史家」と呼ぶことを断っておく。19 世紀前半、1789 年の大革命から時間がさほど経っていないために、その成果についての評価が確定しておらず、一方では革命の断絶性を重要視する歴史家群と、他方では革命前後の連続性をより重視する歴史家群と、双方が存在していた。下に見る引用中の下線部のように、民衆はルイ 14 世の治世に生まれつつあった、と聞けば、今日、大革命をアンシャン・レジームと革命後の世界との断絶と考えるのが主流となった我々にとってやや唐突に感じられるが、アントワーヌ・コンパニョンも指摘するように、シャトーブリアンやトクヴィルの考え方は

[44] « Avenir du monde », article publié dans la *Revue des Deux-Mondes* du 15 avril 1834, en « Appendice III » aux *M.O.T.*, t. II, pp. 1503-1504 : « L'Europe court à la démocratie. […] Les peuples grandis sont hors de page : les princes en ont eu la garde-noble ; aujourd'hui les nations, arrivées à leur majorité, prétendent n'avoir plus besoin de tuteurs. […] Maintenant la société quitte la monarchie, du moins la monarchie telle qu'on l'a connue jusqu'ici ».

当時ある程度一般的であったはずである[45]。

Tout devint individuel sous Louis XIV. Le peuple disparut comme aux temps féodaux : on êut dit d'une nouvelle conquête, d'une nouvelle irruption des barbares, et ce n'était que l'invasion d'un seul homme. Observons néanmoins une différence : le nom du peuple ne se rencontre nulle part dans la monarchie de Hugues Capet, parce que le peuple n'existait pas ; il n'y avait que des serfs ; la nation, militaire et religieuse, consistait dans la noblesse et le clergé. Sous Louis XIV, le peuple était créé ; il se perdait seulement dans l'arbitraire, ce qui fait qu'il se retrouva au moment où ses chaînes se rompirent.

Quand la lutte de l'aristocratie avec la couronne finit, la lutte de la démocratie avec cette même couronne commença. La royauté, qui avait favorisé le peuple afin de se débarrasser des grands, s'aperçut qu'elle avait élevé un autre rival moins tracassier, mais plus formidable. Le combat s'établit sur le terrain de l'égalité.

ルイ 14 世治下ですべては王個人のものとなった。民衆は封建時代と同じように消滅してしまった。それはあたかも蛮族らの新たな征服、新たな侵攻のようであったが、実際はたった一人の人間の侵攻でしかなかった。しかしながら、一つの違いに注目しよう。ユーグ・カペーの王国のいかなる場所でも、民衆の名には出会わない。なぜならば、民衆は存在していなかったからである。ただ、農奴がいただけだ。軍事的そして宗教的国民は、貴族と聖職者で構成されていた。 ルイ 14 世のもと、民衆は創出されつつあったのだ。民衆は単に専制の森の中で道に迷ってしまったのであり、それゆえ、隷属状態から脱したその瞬間に民衆は自らを再び見出したのだ。

貴族階級の王権との戦いが終わった時、民主主義とまさしくこの王権との戦いが開始されたのであった。王権は大物たちを一掃するために民衆を唆したのであったが、以前のよりも煩わしくないが、さらに恐ろしい、別のライヴァルを育て上げてしまったことに気づいた。闘争は平等の分野で生じたのだ。(*Analyse raisonnée de l'histoire de France*, pp. 479-480.)

上記のシャトーブリアンの論理によれば、カペー王朝（ヴァロワ朝、ブルボン朝も含めた意味で）が、七百年をかけて、アリストクラシーから自由を奪い自分以外の存在を平準化することによって、権威主義と中央集権主義を浸透させ社会変革を行った結果、農奴に

[45] Antoine Compagnon, « Tocqueville et Chateaubriand : deux antimodernes? », in *Tocqueville et la littérature*, sous la direction de Françoise Mélonio et José-Luis Diaz, Presses de l'Université Paris-Sorbonne, 2005, p. 45.

代わって民衆という新勢力が誕生しつつあった。だが、彼らはこの世に誕生するまで、かなりの時間、表面に現れない存在に甘んじなければならず、その間に「平等」を熱愛する階層となる準備を経て、1789 年に一気にアイデンティティーを回復したのだ。

実際、ルイ 14 世の絶対王政とはいっても、王権は万能ではなく、過去から引き継いできた伝統に配慮し、各地方が保持してきた特権や土着の慣習法などに制約されていた。王の勅令でも、各主要都市にある高等法院の審査において各地方の利権を侵害しないものと認められなければ法として発効しえず、王権対高等法院の対立はアンシャン・レジームを通して続いていた。13 世紀には農奴制消滅の動きが始まり、パリではヴァロワ朝出現以前に全面的に消滅した一方で、「あちこちで、農奴制の孤島は革命まで続いた[46]」。革命によってこそ王権が推進してきた強力な中央集権化が完了し、近代的な民族国家が成立するのだ。

ところで、王権は貴族階級との戦いにおいて、しばしば一般大衆の支持を利用してきた。ルイ 13 世の時代には、王権は広く世論の支持を取り付けるために、1631 年 5 月に週間情報誌を発行、官報として利用した。「ガゼット」紙 *La Gazette* と呼ばれたこのフランス初の新聞は、王権に都合のよい内容を伝えて世論操作に一役買ったのである。それと同様に、ナポレオン・ボナパルトにとっても、民衆の人気がひとつの重要な政治基盤であった。ナポレオンも今で言うメディア戦略に長けていたことはよく知られている。シャトーブリアンにおいて、ルイ 14 世とナポレオンは対にして語られるべき専制君主であった。

> Les troubles de la minorité de Louis XIV, mêlés à des victoires sur l'étranger, achevèrent de former des généraux et de créer une armée régulière, élément indispensable du despotisme civilisé : ainsi les troubles, les victoires et les habiles capitaines de la république préparèrent tout pour la domination de Buonaparte. Aux deux époques on était las de révolution, et l'on avait des moyens de conquêtes. Louis XIV, comme Napoléon, chacun avec la différence de son temps et de son génie, substituèrent l'ordre à la liberté.
>
> ルイ 14 世の幼少期の騒擾は、外国に対する勝利と相まって、将軍たちを作り出し、文明化された専制主義にとって不可欠の要素である常備軍を生み出した。同様に、フランス共和国の騒擾、勝利、敏腕の隊長たちによって、ブオナパルテの支配のための全てが準備されたのだ

[46] Marc Bloch, *Les caractères originaux de l'histoire rurale française*, Oslo, H. Ashehoug, 1931, p. 117 ; マルク・ブロック『フランス農村史の基本性格』河野健二・飯沼二郎訳、創文社、1986 年、163 頁。

った。この二つの時代に、人々は革命に倦んでおり、征服の手段を持っていた。ルイ 14 世とナポレオンは、各々、時代と才能の違いはあるが、自由の代わりに秩序をもたらしたのだ。(*Analyse raisonnée de l'histoire de France*, p. 481.)

このように、ルイ 14 世とナポレオンを、「自由」と引き換えに混乱する社会に「秩序」をもたらした、同類の「専制君主」として描く一方で、ブルボン正統王朝と、コルシカ出身の軍人が打ち立てた政権と、それぞれの成した事業の歴史的意義の差にもシャトーブリアンは言及する。

Mais si les conquêtes de la monarchie militaire plébéienne n'ont point été annexées à notre sol comme les conquêtes de la monarchie royale absolue, elles ont eu un effet moral que n'ont pas eu les profits tout matériels des envahissements de Louis XIV. Nos armées, comme celles d'Alexandre, ont semé les lumières chez les peuples où notre drapeau s'est promené : l'Europe est devenue française sous les pas de Napoléon, comme l'Asie devint grecque dans la course d'Alexandre.
しかし、平民による軍事君主制の行った征服（＝ナポレオン戦争）の数々が、絶対王政の行った征服と異なり、我々の土地に少しも併合されなかったとはいえ、それらは、ルイ 14 世の侵略がもたらしたきわめて物質的な利益にはなかった、一つの精神的な効果を持っていた。我々の軍隊は、アレクサンドルの軍隊のように、我々の旗が行軍した地域の諸国民のもとに、知の光明の種を蒔いたのであった。アレクサンドルの行軍によってアジアがギリシア化したように、ヨーロッパはナポレオンの進軍によってフランス化したのだ。(*Analyse raisonnée de l'histoire de France*, p. 482.)

二つ上の引用では、「ブオナパルテ」と、ナポレオンを外国人としてさげすんだ際の姓の読み方で呼んでいるにもかかわらず、すぐ上の引用では、「物質的な利益」をもたらしたルイ 14 世の戦争に対して、ナポレオン戦争の「精神的な効果」を強調している。ナポレオンの軍隊を「我々の軍隊」、その軍旗を「我々の旗」と愛着をこめて呼び、「我々の旗が行軍した地域の諸国民のもとに、知の光明の種を蒔いたのであった」という、18 世紀という啓蒙の世紀の申し子たるフランスが、ヨーロッパ中にその革命の成果を広めたという趣旨の表現は、ナポレオンに対立しつつも、シャトーブリアンもまた、その天才的な人物の魅力の虜になっていたことが窺える一節であろう。

――第２節　　中央集権化と古典主義

ところで、宮廷から遠く、決して豊かではない地方貴族出身のシャトーブリアンの出自からしても、ルイ 14 世期の政治体制に批判的であることは当然かもしれない。また、ルイ 14 世へと引き継がれる中央集権化を推進した、宰相リシュリュー、ルイ 13 世の治世下での実質的な最高権力者に対しても厳しい筆致で臨んでいる。

> Il (Richelieu) apparaît comme la monarchie absolue personnifiée, venant mettre à mort la vieille monarchie aristocratique. Ce génie du despotisme s'évanouit, et laisse en sa place Louis XIV, chargé de ses pleins pouvoirs.
> 彼（リシュリュー）は、あたかも古くからあった貴族君主制を滅ぼしに登場し、絶対王政を体現しているかに見える。この専制主義の天才は消え去ったが、自らの場所にルイ 14 世を残してゆき、今度は彼がその全権を担ったのだ。(*Analyse raisonnée de l'histoire de France*, p. 476.)

また、1628 年に断行された、新教徒の牙城であるラ・ロッシェルの制圧については、「信教の自由」が死んだと述べるとともに、文芸の分野においても創作の自由が失われ、「専制的な」古典主義への道が敷かれたとリシュリューの政策をことごとく非難する。

> Toutes les libertés meurent à la fois, la liberté politique dans les états congédiés, la liberté religieuse par la prise de La Rochelle ; car la force huguenote demeura anéantie, et l'édit de Nantes ne fut que la conséquence de la disparition du pouvoir matériel des protestants. La liberté littéraire périt à son tour : on avait passé de l'école naïve, simple, originale d'Amyot, de Rabelais, de Marot, de Montagine, à l'école artificielle et boursouflée de Ronsard. Malherbe rentra dans la première route : les sujets étrangers à nos mœurs et à nos croyances furent choisis de préférence. Alors s'éleva l'Académie française, haute cour du classique, qui fit comparaître devant elle, comme premier accusé, le génie de Corneille. Racine vint ensuite imposer aux lettres le despotisme de ses chefs-d'œuvres, comme Louis XIV le joug de sa grandeur à la politique.
> すべての自由が同時に死ぬ、身分制議会が開かれない状態において政治的自由が、ラ・ロッ

シェルの陥落によって宗教的自由が。というのも、その後ユグノーの力は壊滅させられたままとなり、ナントの勅令はプロテスタントの実質的な影響力の消滅の結果に他ならなかったからだ。そしてその次は文学の自由が消え去った。既に、アミヨ、ラブレー、マロ、モンテーニュといった、単純で独創的、素朴な流派から、ロンサールの技巧的で仰々しい流派へ移っていたが、そこへマレルブが第一人者として乗り込んで来て、私たちフランス人の習俗や信仰に馴染まない主題が、むしろ選択された。そうして、古典主義の高等法院たるアカデミー・フランセーズが設立され、その法廷の前に、第一級の被告人として天才コルネイユが出頭させられた。次いでラシーヌが、文学に彼の数々の傑作を専制主義として押し付けにやって来た。ちょうどルイ 14 世がその威光の頸木を政治に押し付けたように。 (*Analyse raisonnée de l'Histoire de France*, p. 475.)

周知のとおり、アカデミー･フランセーズはリシュリューの肝いりで発足した機関であり、フランス語の純化や文芸の保護という、今日まで成果が残る功績は大きい反面、当時主流となった古典主義美学でもってフランス文学を統制し、その規範から外れるものは表舞台から放逐してしまった、というシャトーブリアンの意見もあながち過ちではないであろう。第一部で検討したように、18 世紀に古典主義世界観から人々の意識が徐々に離れることで刷新された「自然」の概念を考えれば、単なる誇張とも言えず、真実の一面を突いているのではないであろうか。また、世論操作の手段であった官報「ガゼット」紙もまた、リシュリューが推進した政策であったことを忘れてはならない。

上の引用では、一国一宗教が一般的な当時のヨーロッパにおいて、非常に進歩的と考えられてきた信教の自由を認めるナントの勅令の発布（1598 年）をわざわざとりあげ――ナントの勅令を廃止した事実(1685 年)ではなく――、「プロテスタントの実質的な影響力の消滅の結果に他ならなかった」とは、一見しただけでは奇異に感じられるかもしれないが、アンリ 4 世の時代の極端な暴力性を考えれば、そのような法律を発布しても差し支えない程度にまで新教徒の勢力が弱体化していたと考えることも可能かもしれない。

それにしても、フランス演劇の大御所ラシーヌの傑作を、政治における「ルイ 14 世の威光の頸木」のごとく、文学に押し付けられた「専制主義」と呼ぶ辛辣な表現には、端正かつ明晰を良しとする古典主義美学から離れ、あふれ出る情念を自然描写と結び付けたシャトーブリアンの作家としての反抗心がここでも表れているといえよう。

――第３節　　歴史の裏側

最盛期の歴史を物語る際、その表側の威光によって消し去られがちな歴史の裏面の告発を、17 世紀の歴史・文学の専門家クリスチャン・ジュオーは、偉大な世紀の「非神話化」« démystification »と呼んでいる[47]。

シャトーブリアンも『墓の彼方からの回想』のなかで、とくに「ナポレオン伝」と評されるべき、実に回想全体の約四分の一を占める部分、第 19-24 巻（Les Livres XIX-XXIV）の終盤にある「百日天下」の章で、歴史の裏側を告発しようという決意を述べている。

> Je vous fais voir l'envers des événements que l'histoire ne montre pas ; l'histoire n'étale que l'endroit. Les *Mémoires* ont l'avantage de présenter l'un et l'autre côté du tissu.
>
> 私は、歴史が見せてはくれない出来事の裏面をあなたにお見せしよう。歴史とは表側しか広げてくれないものだから。『回想』はその表も裏も提示するという利点をもっている。(*M.O.T.*, Livre XXIII, chapitre 12, t. I., p. 1164-1165.)

こうした宣言どおり、シャトーブリアンは、自らが生きた時代の歴史の裏を 17 世紀の回想録作者であるサン＝シモンやレー枢機卿 Cardinal de Retz に倣い、後半生をかけて『墓の彼方からの回想』に綴った。さらに最晩年、太陽王の時代について『ランセ伝』(1844)を執筆することになり、実質的にはこれが生前に公刊された最後の著作となった。ランセ Armand-Jean Le Bouthillier de Rancé (1626-1700) は、有力な法服貴族の家に生まれ、名付け親には時の権力者リシュリュー枢機卿を持ち、当初は在俗の聖職者録を受けていたが（abbé commendataire 修道院外聖職者大修道院長）、1657 年に回心、社交界と決別し、シトー会に属するラ･トラップ修道院に入り、院長として、衰微していたシトー会の抜本的改革を実行した人物である。シャトーブリアンは、崇敬する清貧なセガン師 l'abbé Séguin の依頼に応える形で、ランセの伝記を執筆したのであるが、彼にとって、ランセの生涯とは、17 世紀の栄光と偉大の「孤独なる裏側」« l'envers solitaire »[48]に他ならない。

---

[47] Christian Jouhaud, « Envers », dans *Sauver le Grand-Siècle?*, Seuil, 2007, p. 137.
[48] *Ibid.*, p. 141.

Par Rancé, le siècle de Louis XIV entra dans la solitude, et la solitude s'établit au sein du monde.
ランセによって、ルイ 14 世の世紀は孤独の中に突入した、そして孤独が社会の内奥に打ち立てられたのだった。(*Vie de Rancé*, p. 124.)

『ランセ伝』は、ルイ 14 世の世紀に生きた人物の伝記にもかかわらず、ここでもナポレオンと太陽王がしばしば比較される。ナポレオンは「まるでルイの栄光を確かなものにするためにアンヴァリッドのドームの下に身を置きにやって来た」ものの、無駄に終わったと述べる。ナポレオン帝国がいくら勝利を重ねようとも、太陽王の世紀の勝利の数々を消し去ることなど無論できはしなかったのだ。

Bonaparte a fait son siècle ; Louis a été fait par le sien : qui vivra plus longtemps de l'ouvrage du temps ou de celui d'un homme ? C'est la voix du génie de toutes les sortes qui parle au tombeau de Louis ; on n'entend au tombeau de Napoléon que la voix de Napoléon.
ボナパルトは自らの世紀を作ったが、ルイは彼の世紀によって作られたのだ。時の作品と、ひとりの人間の作品と、どちらがより長く生きることになるだろうか？ルイの墓で語るのはありとあらゆる種類の天才の声であるが、ナポレオンの墓で聞こえてくるのは、ただナポレオンの声のみである。(*Vie de Rancé*, p. 80.)

シャトーブリアンによれば、ナポレオンというひとりの天才によって成就したのが 19 世紀の帝国であるのに対し、「時の作品」« l'ouvrage du temps » つまり運命によって成されたのがルイ 14 世の世紀であるという。

すでに見た『フランス史の理論的分析』においては、ルイ 14 世とナポレオンを比較して、権力を奪取した「成り上がり者」のナポレオンを批判しながらも、シャトーブリアンと同時代のフランス人たちの行っている事業のほうが、より偉大な世界史的意義を持っている、という自負が感じられはしなかったであろうか？一方で、ルイ王のブルボン絶対王政期の軍事的栄光のもたらしたものは、一国にとっての単なる物理的な利益にすぎない、と主張していた。それに引き換え、晩年の『ランセ伝』では、二人の帝王の個人としての力量の差はともかく、時代の功績としては、太陽王の世紀のほうがより偉大だという。一見しただけでは、シャトーブリアンの二帝王への評価は、七月革命前夜から『ランセ伝』までの十数年間に 180 度転換しているような印象を受けるが、本当にそうであろうか。

――第４節　　「廃墟の帝国」

『ランセ伝』には、ルイとナポレオンの比較にとどまらず、17 世紀の修道院改革者について語りながらも、しばしば筆者シャトーブリアン自身や彼の同時代の事柄が挿入され、現在と過去の行き来を繰り返す。ルイ大王の時代と大革命の時代、そして 19 世紀は、シャトーブリアンの語りの中でいとも簡単に連続することになる。以下は、ルイ 14 世の時代の叙述から、大革命のさなかにサン＝ドニの王家の霊廟が荒らされる場面が連想され、シャトーブリアン自身が突如として前面に出現する部分である。

> Enfin l'ordre de la démolition du couvent arriva le 25 janvier 1710, dix ans après la mort de Rancé. Cet ordre *fut exécuté avec fureur*, selon Duclos. Les cadavres étaient déterrés au bruit de ricaneries obscènes, tandis que dans l'église les chiens se repaissaient de chair décomposée. Les pierres tumulaires furent enlevées […] Louis-le-Grand, vous avez enseigné à votre peuple les exhumations ; accoutumé à vous obéir, il a suivi vos exemples : au moment même où la tête de Marie-Antoinette tombait sur la place révolutionnaire, on brisait à Saint-Denis les cercueils : au bord d'un caveau ouvert, Louis XIV tout noir, que l'on reconnaissait à ses grands traits, attendait sa dernière destruction ; représailles de la justice éternelle ! « Eh bien, peuple royal de fantômes », je me cite (je ne suis plus que le temps), « voudriez-vous revivre au prix d'une couronne? Le trône vous tente-t-il encore? Vous secouez vos têtes, et vous vous recouchez lentement dans vos cercueils. »
>
> ついに修道院解体令（ポール＝ロワイヤル修道院）が 1710 年 1 月 25 日、ランセの死から 10 年後に下された[49]。この命令は、デュクロによれば、*猛烈な勢いで執行された*。墓所の死骸は猥らな嘲笑とともに掘り出される一方で、教会の中では犬たちが腐敗した肉を食らい、墓石ははがされた。（中略）ルイ大王よ、あなたはあなたの民衆に発掘というものをお教えになった。あなたに服従するのに慣れてしまった彼らは、あなたを見習ったのだ。マリー＝アントワネットの首が革命広場に落ちていたまさに同じ瞬間に、人々はサン＝ドニで棺を打ち砕いていた。口を開けた地下墓所の入り口で、真っ黒になったルイ 14 世は、その大きな目鼻立ち

[49] シャトーブリアンによれば、ラ・トラップ修道院のほうは、ランセの巧妙なやり方のおかげで破滅を免れた、とある。(*Vie de Rancé*, p. 123.)

でその人と認められたのだが、自らに加えられる最後の破壊を待っていた、すなわち永遠なる正義の復讐を！「さあ、よいですか、亡霊となった王侯の皆様」、私は自らの過去の言葉を引用するが（私はもはや時にしか従わない）、「あなた方は王冠と引き換えに現世に甦ることをお望みか？それとも玉座はいまもあなた方の気をそそるものなのか？こう聞くと、あなた方は首を振り、それぞれの棺の中にゆっくりと再び横になるのだ。」(イタリック体強調は原著者による。*Vie de Rancé*, pp. 123-124.)

この王家の亡霊たちとの対面は、実はすでに『キリスト教精髄』で描かれていた(*Génie*, p. 939)。『精髄』での王族に対する問いかけの台詞が、要約されて『ランセ伝』に再使用されているのだ（上の引用の下線部分）。「私はもはや時にしか従わない」« je ne suis plus que le temps »という文は、このパラグラフだけでは何を意味しているか判然としないが、台詞の引用元である『精髄』に立ち戻ってみれば、手がかりがつかめる。そこでは、サン＝ドニの地下霊廟は「廃墟の帝国」« l'empire des ruines »と呼ばれているのだ。

Ici, les ombres des vieilles voûtes s'abaissent, pour se confondre avec les ombres des vieux tombeaux ; là, des grilles de fer entourent inutilement ces bières, et ne peuvent défendre la mort des empressements des hommes. Écoutez le sourd travail du ver du sépulcre, qui semble filer, dans ces cercueils, les indestructibles réseaux de la mort ! Tout annonce qu'on est descendu à l'empire des ruines ; et, à je ne sais quelle odeur de vétusté répandue sous ces arches funèbres, on croirait, pour ainsi dire, respirer la poussière des temps passés. […] Mais où nous entraîne la description de ces tombeaux déjà effacés de la terre ? Elles ne sont plus, ces sepultures ! Les petits enfants se sont joués avec les os des puissants monarques : Saint-Denis est désert ; l'oiseau l'a pris pour passage, l'herbe croît sur ses autels brisés ; et au lieu du cantique de la mort, qui retentissait sous ses dômes, on n'entend plus que les gouttes de pluie qui tombent par son toit découvert, la chute de quelque pierre qui se détache de ses murs en ruine, ou le son de son horloge, qui va roulant dans les tombeaux vides et les souterrains dévastés.

こちらでは、古い穹窿の影が低くなって、古い墓の影と溶け合っている。あちらでは、鉄格子があれらの棺を取り囲んでいるが無駄で、死を人間の熱狂的行動から守ることはできない。墳墓の蛆虫のひそかな仕事に耳を澄ませてごらんなさい、あれらの棺の中では、不滅の死の網目がめぐらされているようだ。ここのすべてが、廃墟の帝国に降りてきたことを告げてい

る。そして、これらの櫃（ひつぎ）の下に拡がっている、何だか分からない老朽化したものの臭いのために、いわば過ぎ去った時の埃を吸っているような気分になるのだ。（中略）だが、地上からすでに消されてしまったあれらの墓の描写が、我々をどこへ導くというのだ？あれらの墳墓はもはやないというのに！幼い子供たちは強大であった君主らの骨で戯れている。サン＝ドニは人けがない。鳥はそこを抜け道と思い、壊された祭壇の上には草が生え、かつてはその天蓋の下で響いていた死者のための賛歌の代わりに聞こえるものといえば、むき出しになった屋根から落ちる雨の雫、廃墟となった壁から剥がれ落ちるいくつかの石、空っぽの墓所と荒らされた地下に鳴り響く大時計の音だけなのだ。(*Génie*, pp. 938-939.)

第一部でも述べたように、シャトーブリアンは、今見た『精髄』のサン＝ドニ聖堂とは別の箇所で廃墟の詩学を論じており、廃墟に「時の作品」と「人間の作品」の二種類を認めている。さらには、神が時の鎌を人間にいっとき与えることによって、通常なら何世紀もかかるような破壊が、たった一瞬で、恐ろしいまでに遂行されることもあるという。

Il y a deux sortes de ruines : l'une, ouvrage du temps ; l'autre, ouvrage des hommes. Les premières n'ont rien de désagréable, parce que la nature travaille auprès des ans. Font-ils des décombres, elle y sème des fleurs ; entrouvrent-ils un tombeau, elle y place le nid d'une colombe : sans cesse ocupée à reproduire, elle environne la mort des plus douces illusions de la vie.

Les secondes ruines sont plutôt des dévastations que des ruines ; elles n'offrent que l'image du néant, sans une puissance réparatrice. Ouvrage du malheur, et non des années, elles ressemblent aux cheveux blancs sur la tête de la jeunesse. Les destructions des hommes sont d'ailleurs plus violentes et plus complètes que celles des âges : les seconds minent, les premiers renversent. Quand Dieu, pour des raisons qui nous sont inconnues, veut hâter les ruines du monde, il ordonne au Temps de prêter sa faux à l'homme ; et le Temps nous voit avec épouvante ravager dans un clin d'œil ce qu'il eût mis des siècles à détruire.

廃墟には二種類ある。ひとつは時の作品であり、もう一方は人間の作品である。前者には不愉快なところが全くない、何故ならば自然は年月に対して作用するからである。年月は瓦礫を作るが、自然はそこに花々を蒔く。年月は墓を押し開けるが、自然はそこに鳩の巣を配置する。そのように自然は絶えず再び生み出そうと努めて、死のまわりをこの上もなく優しい生の幻影で包むのである。

二つ目のほうは、廃墟というよりはむしろ荒廃である。それらはひとかけらの修復力も示さず、ただ虚無のイメージしか見せない。不幸の作品であって、年月の為したものではないそれらは、若者の頭に生えた白髪に似ている。しかも人間の破壊行為は年月の破壊よりもより激しくより完璧である。年月は少しずつ蝕むが、人間は転覆させる。我々にはうかがい知れぬ理由で、神が世界の崩壊を早めたいと望むとき、神は時(間)にその鎌を人間に貸すことを命じる。そして、時は、自分なら何世紀も破壊にかけるものを、我々がたった一瞬で荒廃させてしまうのを恐怖とともに見るのである。(*Génie*, p. 882.)

『ランセ伝』でも、栄光ある太陽王の世紀のことをやはり「時の作品」と呼んでいた。その世紀の忘れ形見でもある荒廃したサン＝ドニ霊廟こそ、まさしく「時」と「人間」の双方による破壊によってできた廃墟として、シャトーブリアンが我々に提示する例であろう。

ルイの世紀は、「時」つまり運命によって作り上げられたが、ルイの死後百年足らずで、今度は「時」による破壊と、王家から見れば「我が子」たるフランス国民の子孫たちによる破壊と（＝「ルイ大王よ、あなたはあなたの民衆に発掘というものをお教えになった。あなたに服従するのに慣れてしまった彼らは、あなたを見習ったのだ」）を蒙ったのである。そこにはもはや空虚や寂寞といったものしか感じられない。シャトーブリアンにとって、この世で最も確かなもの、いかなる存在をも抗うことのできぬ最強のものは、「時」なのである。『アメリカ紀行』において彼は新大陸の未開民族の習俗や国家を分析しているが、そのなかで「力は時の代わりにはなれない。最初の政治的教育というものがある国民に欠けているとき、この教育は年月により為されるのを待つしかないのだ[50]」と述べている。このような、「時」が世界を建設していくものであるという考え方は、「神の最初の代理者[51]」たる「時」を聖化することで、昔から続いてきたという時間の経過が＜権威＞を保障することを説明し、時＝神によって与えられた王権の正当性を主張したボナールやメーストルらと通じる点でもある。ただ、シャトーブリアンの場合は、時の聖化から出発して、神に認められた王権が絶対的であるという論理にではなく、より心情的、あるいは（大革命の体験から）経験的と言ってもよいかもしれないが、以下に見るように、この世は必然的に変

---

50 *Voyage en Amérique*, p. 387 : « La force ne remplace point le temps ; quand la première éducation manque à un peuple, cette éducation ne peut être que l'ouvrage des années ».

51 竹原良文「＜正統主義＞の原理とその形成――王政復古の政治思想――」、九州大学『法政研究』、43(3-4)、1977 年、295 頁(265-302 頁)。

転していくもの、空虚なるもの、という悲観的展望に帰着する[52]。

Pardonne, ô Seigneur, si nous avons murmuré en voyant la désolation de ton temple ; pardonne à notre raison ébranlée ! l'homme n'est lui-même qu'un édifice tombé, qu'un débris du péché et de la mort ; son amour tiède, sa foi chancelante, sa charité bornée, ses sentiments incomplets, ses pensées insuffisantes, son cœur brisé, tout chez lui n'est que ruines.

お許しを、おお主よ、もし我々が荒廃したあなたの聖堂を目にして不平不満を言ったならば。我々の理性が揺るいだのをお許し下さい！人間は彼自身一個の倒れた構築物、そして罪と死の残滓でしかないのです。彼の熱意のない愛、揺らぐ信仰、偏狭な慈悲、不完全な感情、不十分な思考、打ち拉がれた心、彼の内にある全ては廃墟でしかないのですから。(*Génie*, p. 883.)

この世の全てに空虚を見る感受性は、若い頃の『キリスト教精髄』から晩年の『ランセ伝』にいたるまで、熟年期にさまざまな政治論争のただ中に精力的に身を置くことがあろうとも、ずっとシャトーブリアンの奥底に流れているといえよう。

このように、シャトーブリアンは栄光の絶対王政の時代を描きつつ、その行く手に待っている滅びの運命を容赦なく暴き出すのである。彼にあっては、ルイ 14 世の世紀は、革命によって滅び去った過去のフランスの記憶ではなく、19 世紀現在まで連続している。しかも、生と死の世界を連結するモニュメントであると同時に栄光の記憶を宿すはずの王家の墓所は、いまやズタズタに荒らされた廃墟である。ルイとナポレオン、いずれが偉大であるかは、シャトーブリアンにとってはもはや重要な問題ではない。というのも、太陽王の時代について、本章冒頭に引用した『フランス史の理論的分析』の表現とほぼ同じ裁断を『ランセ伝』においても下しているからである。

Sous Louis XIV, la liberté ne fut plus que le despotisme des lois, au-dessus desquelles s'élevait, comme régulateur, l'inviolable arbitraire. Cette liberté esclave avait quelques avantages : ce qu'on perdait en franchises dans l'intérieur, on le gagnait au-dehors en domination : le Français était enchaîné, la France

[52] Cf. 片岡大右「＜詩的神学＞あるいは転倒したキリスト教――シャトーブリアン『キリスト教精髄』をめぐって」、日本フランス語フランス文学会『フランス語フランス文学研究』81、2002 年、11 頁（3-12 頁）:「シャトーブリアンにあって基本的なのは荒涼の感覚にほかならないということだ。（中略）死と時間とは、すでに原初より世界を浸しているのであり、それとは無縁な十全たる生の世界など彼には問題とならないかのようだ。」

libre.

ルイ 14 世の治世下、自由とはもはや法律による専制主義でしかなかった。法の上には、制御装置としての侵すべからざる独裁がそびえていた。こうした奴隷としての自由には、いくつかの利点があった。つまり、国内での自由身分としては失ったものを、国外での支配において獲得したのだ。フランス人は鎖につながれているが、フランスは自由なのだ。(*Vie de Rancé*, p. 86.)

時代の栄光が、つまり表側がまぶしく輝けば輝くほど、その裏の影は深く、濃いものであり、しばしば、その光に打ち消されてしまう。シャトーブリアンは、世間の皆が忘れがちな、栄光の裏面を表現することを自らの使命としていた。確かにそれは、自らの政治的キャリアにおける不遇をかこつための一つの手段だったかもしれないが、『殉教者たち』に続いて、1811 年に『パリ＝エルサレム紀行』にて再び文学作品を書くための筆を擱いた[53]、と宣言した後も、積極的に政治的文書で世の中への問いかけを続けたのであった。

第３章　大革命を乗り越えた先に。平等か？自由か？――政治論文を通して――

――第１節　　王政復古、1814 年におけるシャトーブリアン

第一部で見たように、シャトーブリアンは『革命試論』執筆当時から、大革命の理論的基礎となった 18 世紀啓蒙哲学に対して、すでに両義的で懐疑的な傾向を露わにしていた。そこでは、啓蒙哲学に惹かれながらも、革命の暴力を目の当たりにして嫌悪感を抱くことになった彼の心情が窺える。革命が避けられないものであったことを承知し、社会の変化と歴史の進行を受入れつつも、古き時代の貴族の美徳、たとえそれが幻想だったとしても、貴族階級の精神の高邁さを誇りとする彼にとって、何らの躊躇もなく革命派、共和派になることは不可能なことであった。

シャトーブリアンにとって、フランス革命とは、はるか昔、同輩の中の「王」にすぎなかったカペー王朝の時代から、ヴァロワ朝、ブルボン朝と歴代王朝が行ってきた、王の周

[53] *Itinéraire*, p. 542.

辺の政治的有力者たち、つまりアリストクラシーの「自由」に裏打ちされた力を削ぎ、個々の国民を平準化するという政策の総仕上げであった。1814 年の時点で、シャトーブリアンは、自らの出身階級であるアリストクラシーが、それまでかろうじて保持していた「諸特権」を革命によって返上してしまったものの、新たな立憲王制において、再び政治的役割を奪還する可能性を信じている。1814 年 11 月に出された『政治省察集』*Réflexions politiques* においては、モンテスキューやマルゼルブの求めていた自由主義との連続性が最も顕著に見られる。例えば、貴族と名誉の結びつきをシャトーブリアンは次のように表現する。

> Maintenant, observons que la noblesse n'est pas composée d'un seul et unique principe : elle en renferme évidemment deux, l'honneur et la vertu ou la liberté.
>
> これからは、貴族は唯一無二の原則で成り立ってはいないということをとくと見よう。貴族は、名誉と徳あるいは自由という二つの原則を明らかにその内に秘めているのだ。(*Réflexions politiques*, p. 196.)

モンテスキューは『法の精神』(1748)において、共和政体を動かすバネが、祖国への愛と平等への愛という「政治的な徳」であるのに対し、君主政体を動かすバネは「名誉」であると論じている。名誉は各人ならびに各身分の先入観ではあるが、共和政体における「政治的な徳」に代わって、「最大の美挙を鼓吹」し、法の力と結び付くことで君主政体を動かしていく。君主政体は、「優越、序列、さらには出自による貴族身分」を前提にしており、「名誉」はその性質上、他者と比較しての優先と特別待遇を要求するものである。したがって、「名誉」という概念は、君主政体の中にもともと組み込まれていると考えられる。「名誉」のおかげで、各人はおのれの「個人的利益に向かっていると信じながら、共同の善に向かっている」ということが生ずる。確かに、これは「偽りの名誉」には違いないが、「政治体のあらゆる部分を運動させ」、その作用によって各部分を結合するゆえに、結果として公共にとって有益となるのである[54]。こうした貴族身分と「名誉」を結びつける考え方をシ

---

54 モンテスキュー『法の精神』(上)、三辺博之他訳、岩波文庫、1989 年、31, 79-80 頁。Montesquieu, *De l'esprit des lois*, dans *Œuvres complètes*, II, édition de Roger Caillois, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1951, p. 227, 256-257 : « […] il faut observer que ce que j'appelle la *vertu* dans la république est l'amour de la patrie, c'est-à-dire l'amour de l'égalité. Ce n'est point une vertu morale, ni une vertu chrétienne, c'est la vertu *politique* ; et celle-ci est le ressort qui fait mouvoir le gouvernement républicain, comme l'*honneur* est le ressort qui fait mouvoir la monarchie. J'ai donc appelé *vertu politique* l'amour de la patrie et de l'égalité. […] L'Honneur, c'est-à-dire le préjugé de chaque personne et de chaque condition, prend la place de la vertu politique dont j'ai parlé, et la

ャトーブリアンは引き継いでいるといえよう。

また、エドマンド・バークの美学的論考である崇高論が 18 世紀ヨーロッパの美意識に大いにインパクトを与え、シャトーブリアンの文学作品にもその余波を見ることができることは第一部で見たが、それのみならず、バークのもうひとつの、そして本来の顔である政治家としての論文『フランス革命についての省察』の影響もここにみることができる。バークがフランス革命に真っ向から反対するこの論文を公刊したのが 1790 年、シャトーブリアンが亡命貴族としてイギリスに滞在していたのが 1793 年から 1800 年までの約 7 年間である。その間、イギリスの文学や政治的、社会的な著作に親しんだことはのちに『墓の彼方からの回想』にも綴られており、シャトーブリアンがバークの『省察』を読んでいたことはまず間違いないであろう[55]。また 1796 年にはバークが設立した亡命貴族の子弟のための学校を見学した際、彼に会ったとも述べているが真偽は定かではない[56]。ただし、亡命時代に刊行した『革命試論』においては、『フランス革命についての省察』を無視し、その代わりにアメリカ植民地に対する課税に反対するこのリベラルな保守政治家について敬意をこめた紹介をしているのみである[57]。『墓の彼方からの回想』になると、「バークはイギリスの政治を過去に引き戻した」とネガティブな語調となるが[58]、1822 年記述の日付がある第 12 巻第一章で、『省察』への言及がある[59]。また、同第五章では、1792 年に（史実は 1791 年 5 月）同じホイッグ党のフォックス Fox とのフランス革命に関しての見解の相違を決定

---

représente partout. Il y peut inspirer les plus belles actions ; il peut, joint à la force des lois, conduire au but du gouvernement comme la vertu même. […] Le gouvernement monarchique suppose […] des prééminences, des rangs, et même une noblesse d'origine. La nature de l'*honneur* est de demander des préférences et des distinctions ; il est donc, par la chose même, placé dans ce gouvernement. […] L'honneur fait mouvoir toutes les parties du corps politique ; il les lie par son action même ; et il se trouve que chacun va au bien commun, croyant aller à ses intérêts particuliers. Il est vrai que, philosohiquement parlant, c'est un honneur faux qui conduit toutes les parties de l'État ; mais cet honneur faux est aussi utile au public, que le vrai le seroit aux particuliers qui pourroient l'avoir ».（イタリック体強調は原著者による。）

55 *Essai sur les révolutions*, « Pléiade», « Notices » par Maurice Regard, pp. 1380-1381.

56 *M.O.T.*, Livre XII, chapitre 5, t. I, p. 643. Cf. Pierre Christophorov, *Sur les pas de Chateaubriand en exil*, Les Éditions de Minuit, 1961, pp. 212-213. クリストフォロフは、もしこの面会が可能だったとすれば、1796 年秋から 1797 年 7 月までの間としている。

57 *Essai sur les révolutions*, p. 516.

58 *M.O.T.*, Livre XII, chapitre 2, t. I, p. 569.

59 *M.O.T.*, Livre XII, chapitre 1, t. I, p. 563 : « Burke sortait de l'individualité nationale politique : en se déclarant contre la Révolution française, il entraîna son pays dans cette longue voie d'hostilités qui aboutit aux champs de Waterloo. » ; バークの『省察』はメーストルに受け継がれて、右派思想の主要な典拠となった。

的にしたバークの議会答弁を目撃したように述べているが[60]、実際にはこの時期シャトーブリアンはロンドン不在だったことが後世の研究者らによって確認されている[61]。

『省察』のバークは、フランス革命が、過去から何を継承すべきか、そして何を変革すべきかを考えることをせず、伝統をすべて破壊しようとしている点を、以下のように激しく非難し、礎のない新社会の脆さを予見している。

> だが、国家社会や法律が聖別さるべき最初の最重要な原理の一つは、この社会内の一時的もしくは一代限りの使用者が、自分たちは先祖から何を継承しやがては彼らの子孫へ何を受け渡すべきかを一切意に介せず、あたかも彼がその完全な主人であるかの如く振舞う結果として、彼らの一存で社会の本源的な機構全体を破壊することによって、あたかも限嗣相続を解除して相続財産を費消することも彼らの権利の一つだ、と考えないようにすることである。このような行為は、結果として彼らの後継人に住居ならぬ廃墟を残し－彼らが先祖の制度を尊敬しなかったのと同様に、今度は自分の子孫に彼らの苦労を何一つ配慮しないよう教え込むことになる。（中略）学術と文芸での蛮風と技術や製作面での未熟練は、地道な教育と世間公認の原理の欠如の不可避な産物であろう。かくては国家社会そのものが、数世代のうちに粉々になって個々人の単なる塵や砂粒へと分解して、<u>最後には天空の風に吹き散らされるだろう</u>[62]。

このバークの主張をそのまま引き継いだかのようなシャトーブリアンの一節が次である。

> Enfin, dans toute constitution nouvelle, il est bon, il est utile qu'on aperçoive les traces des anciennes mœurs. Pourquoi la république française n'a-t-elle pu vivre que quelques momens? C'est (indépendamment des autres causes qui l'ont fait périr) qu'elle avoit voulu séparer le présent du passé, bâtir un édifice sans base, déraciner notre Religion, renouveler entièrement nos lois, et changer jusqu'à

---

60 *M.O.T.*, Livre XII, chapitre 5, t. I, pp. 589-590.『イギリス文学試論』*Essai sur la Littérature anglaise* でもシャトーブリアンはこの出来事に言及しておりその日付を 1796 年と誤っているが、後に『回想』で 1792 年と訂正するもこれも不正確。

61 *Essai sur les révolutions*, note 1, p. 517. *M.O.T.*, Livre XII, chapitre 5, note 36, t. I, p. 1419. Pierre Christophorov, *op. cit.*, p. 180, note (2).

62 Edmund Burke, *The Writings and Speeches of Edmund Burke, volume VIII, The French Revolution, 1790-1794*, edited by L. G. Mitchell, Oxford, Clarendon Press, 1989, « Reflections on the Revolution in France » (pp. 53-293), pp. 145-146 ; エドマンド・バーク『フランス革命についての省察』中野好之訳、岩波文庫、（上）、2000 年、175-176 頁。

notre langage. Ce monument flottant en l'air, qui n'avoit de point d'appui ni dans le ciel, ni sur la terre, s'est évanoui au souffle de la première tempête.

Au contraire, dans les pays où il s'est opéré des changemens durables, on voit toujours une parite des anciennes mœurs se mêler aux mœurs nouvelles, comme des fleuves qui viennent à se réunir, et s'agrandissent en confondant leurs eaux.

結局のところ、いかなる新たな政体においても、古い習俗の痕跡を見出せるということは良いことであり、また有益なことでもある。何故フランス共和国は幾ばくの間しか生き永らえることができなかったのか？それは（共和国を滅ぼした他の原因とは別にして）、フランス共和国が、現在を過去から切り離し、基礎のない大建造物を建立し、我々の宗教を根扱ぎにし、我々の法律を完全に刷新し、我々の使う言語に至るまで変えることを望んだからである。この空中楼閣は、天空にも大地にも支えを少しも持たなかったため、最初の嵐の一吹きで消え去ってしまったのだ。

それとは反対に、安定した変革が行われている国々では、常に古い習俗の一部が、新しい習俗に混じりあっているのが分かる。ちょうど、集まってくるいくつもの川の流れが、合流することで全体が大きくなるように。(*Réflexions politiques*, pp. 180-181.)

全体としてバークの主張と重なり合うことは明白であるが、とりわけ下線部の「空中楼閣が最初の嵐の一吹きで消え去ってしまったのだ」という表現はバークの引用の下線部とぴったり呼応している。また、伝統や祖国を喪失した者・デラシネ déraciné を連想させる « déraciner notre Religion »という表現と、「流れる大河」の比喩はシャトーブリアンに非常に頻繁に使われるものである。また、「安定した改革が行われている国々」とは、18 世紀以降、思想・政治・経済などさまざまな面でフランスより進歩していたイギリスを念頭に置いているものと思われる。こうした見方は当時フランスで広く行き渡っていた。

また、バークは、フランス革命の理論的基礎となった啓蒙哲学を批判し、「野蛮な哲学の体系」« the scheme of this barbarous philosophy »と呼んでおり[63]、シャトーブリアンもこれに対応するかのように、「この上なく有害な学説が叡智の名の下広められ」、「汚れた者を解放する必要性を証明するため、無垢なる者の喉を掻き切ったのだ」と表現する。18 世紀に広

[63] Burke, « Reflections on the Revolution in France » , ed. cit., pp. 128-129 ; バーク前掲訳書、142-143 頁。

まった哲学体系、つまり理性が「神を玉座から追い」やるのだ[64]。

他方で、バーク、シャトーブリアンともに、中世に存在したアリストクラシー主導の議会制に政治的規範を求めているが、これは 18 世紀から 19 世紀初頭に見られた中世趣味と連動していると思われる。19 世紀も後半になれば、滅びゆく貴族階級の、自らの過去へのノスタルジーから生まれた文学趣味と片付けられもしようが、バーク、シャトーブリアンの二人の政治的考察においては、軽視せざるべき精神的中核となっている。まず、バークの説明を挙げよう。

> だが、騎士道の時代は今や昔となり、詭弁家や経済家、計算者の時代が到来して、今日ヨーロッパの栄光は消えうせてしまった。(中略) 近代ヨーロッパにその特徴を与えてきたものは、他ならぬこの精神（=騎士道）なのである。（中略）位階を混同することなく高貴な平等を生み出して、これを社会生活のすべての階梯を通じて下位にまで浸透させたのがこれである。国王を朋友へと和らげ、私人を国王の仲間に高めたのはこの通念であった。それは、暴力や抗争なしに誇りと力の猛々しさを克服して、君主たちに社会的尊敬なる柔らかい拘束への服従を受け入れさせ、苛烈な権威を優雅さに服属させることで、法による国土の征服者を、義理人情で感化させる支配を生み出した。
>
> だが、今や万事が変らねばならない。（中略）理性の新しい征服帝国によって今や解体されようとしている[65]。

シャトーブリアンも、あらゆるところで騎士道的な美徳を重んじており、バークが説明したような貴族主導の中庸なる議会政治のモデルを中世に求める。

> Dans le moyen âge, toute l'Europe, excepté peut-être l'Italie et une partie de l'Allemagne, eût à peu près la même constitution : les Cortès en Espagne, les États-Généraux en France, les Parlemens en Angleterre, étoient fondés sur le système représentatif. L'Europe, marchant d'un pas égal vers la

---

64 *Réflexions politiques*, p. 200 : « Les plus énormes crimes, les doctrines les plus funestes, ont été commis, se sont répandues au nom des lumières. Le ridicule et l'horreur sont venus s'attacher à ces phrases philosophiques, prodiguées sans mesure par des libellistes et des assassins. On a égorgé les blancs pour prouver la nécessité d'affranchir les noirs ; la raison a servi à détrôner Dieu ».

65 Burke, « Reflections on the Revolution in France » , ed. cit., pp. 127-128 ; バーク前掲訳書、140-142 頁。

civilisation, seroit arrivée pour tous les peuples à un résultat semblable, si des causes locales, et des événemens particuliers n'avoient dérangé l'uniformité du mouvement.

中世において、おそらくはイタリアとドイツの一部を除いて、全ヨーロッパはほぼ同様の状態にあった。スペインの議会、フランスの全国三部会、イギリスの議会が、代議制の上に立脚していた。文明へと同じ足取りで歩むヨーロッパは、全ての国民にとって似通った結果に到達したのかもしれぬ。もしも局地的な原因や、その地域に特有な事件が運動の統一性を乱さなかったならば。(*Réflexions politiques*, p. 202.)

こうしてバーク、シャトーブリアンのテクストを比較しながら読み直して見えてくることがある。彼らが主張していたのは、彼ら自身が所属する階級の旧来の権利を保守しようという利己的な要求ではない。もしも伝統を根扱ぎにして、何を残して何を改めるかを熟考することなく、急激に全てを破壊し、机上の理論にのみ基づいてまっさらな新しい社会を構築しようとすれば、社会が非常に脆弱で不安定になり、暴走するであろうという同胞への警鐘なのだ。

ただし、伝統的なるものについて、バークとシャトーブリアンでは見方が異なる点に注意しておかねばならない。バークにおいては、伝統とは、物事の価値を吟味し決定するための揺るがぬ根拠である。しかし、シャトーブリアンは、確かに伝統は長く存続してきたが故に権威を備えてはいるが、物事の価値あるいは利害関係のほうが、伝統にその存在基盤を与えてきたと考える。歴史とは勝者が綴ってきたものであるから、敗者の側の事情は切り捨てられ闇に葬られる。だからこそ彼は、さまざまな事件や事実の表面ではなく、その裏に隠された人間たちの利害をめぐる駆け引きや陰謀を見ようとするのだ[66]。そういう意味で、シャトーブリアンはバークのように自らの帰属する階級が担っていたかつての社会に対して郷愁を抱きつつも、ただ復活させればよいと考えているのではなく、「革命には常に何かしら良いことがあるものだし、その良いことは革命そのものよりも後の世まで残るものだ[67]」という言葉にみられるとおり、各社会には時代に即した変化が必要であるという意識が強いといえよう。

---

[66] *M.O.T.*, Livre XLII, chapitre 2, t. II, p. 951 : « Le secret des contradictions des hommes du jour est dans la privation du sens moral, dans l'absence d'un principe fixe et dans le culte de la force […] Derrière les phrases libérales des dévots de la Terreur, il ne faut voir que ce qui s'y cache : le succès divinisé ».

[67] *Essai sur les révolutions*, p. 950 : « il y a toujours quelque chose de bon dans une révolution, et ce quelque chose survit à la révolution même ».

――第 2 節　　七月革命前後のシャトーブリアンとトクヴィル理論

王政復古が倒れた七月革命の後、シャトーブリアンは失望のなか、有名な次の言葉を述べる(1831 年)。そこには、『革命試論』以来の彼の特徴であるアンビヴァランス、確固たる一つの立場に定まることのできない性格がよく現れている。

> Quant à moi, qui suis républicain par nature, monarchiste par raison, et bourbonniste par honneur, je me serais beaucoup mieux arrangé d'une démocratie, si je n'avais pu conserver la monarchie légitime, que de la monarchie bâtarde octroyée de je ne sais qui.
> 私について言えば、生まれながらの本性によって共和主義者であり、理性によって君主制主義者であり、名誉によってブルボン家支持者である私は、もしも私が正統的君主制を保持することができないのであれば、氏素性の分からぬ者によって与えられた非嫡の君主制とよりも、民主主義との方がずっとうまくやれたかもしれない。(*De la nouvelle proposition relative au banissement de Charles X et de sa famille*, p. 620.)

これは後に『墓の彼方からの回想』にも表現を少し変えて再登場することになる。

> Démocrate par nature, aristocrate par mœurs, je ferais très volontiers l'abandon de ma fortune et de ma vie au peuple, pourvu que j'eusse peu de rapport avec la foule.
> 生まれながらの本性によって民主主義者であり、品行によって貴族である私は、喜び勇んで私の財産と私の生命を民衆に与えることだろう、ただし群集とはほとんど係わり合いを持たなければの話であるが。(*M.O.T.*, Livre XXXV, chapitre 27, t. II., p. 646.)

こうした不確定な態度によって、シャトーブリアンは王党派からも共和派からも非難され、政敵に攻撃された。また、その論理の両義性が彼の政治的歴史的テクストの捉えにくさともなっているのだ。シャトーブリアンの民主主義や自由についての思考を検討しようとする際、シャトーブリアンとの近似性によって我々の前に浮上してくるのが、トクヴィルであろう。

シャトーブリアンより一世代若いアレクシス・ド・トクヴィルは、シャトーブリアンの

兄嫁の祖父であるマルゼルブの曾孫にあたる。彼が参照したと考えられる文献の中にシャトーブリアンの『革命試論』、『キリスト教精髄』が挙げられることはあるが、トクヴィル自身が明確にシャトーブリアンを参照元として明示していないこともあり、直接この二人が比較検討される機会はほとんどなかった。だが、この詩人と政治家の代表的な著作は、公刊年代がちょうど交互になっており、マルク・フマロリが指摘するように、影響を与え合っていることが考えられる。シャトーブリアンの『アメリカ紀行』*Voyage en Amérique*(1826)はトクヴィルの『アメリカのデモクラシー』*De la démocratie en Amérique* 第一巻(1835)の中に、そして平等な社会の未来を危惧するトクヴィル『アメリカのデモクラシー』第二巻(1840)はシャトーブリアンの『墓の彼方からの回想』(1848)に、そしてシャトーブリアンの『歴史研究』*Études historiques*(1831)は回想録とともにトクヴィルの『アンシャン・レジームと革命』*L'ancien régime et la révolution*(1856)の中に、それぞれ反映しているとフマロリは説明している[68]。

トクヴィルが『アンシャン・レジームと革命』で展開するよりもずっと以前に、シャトーブリアンは、自由と平等について、新時代をもたらしたフランス革命が持つ裏側、もうひとつの核心部分をつく。すなわち、フランス革命と人民は、以下に見るように、自由ではなく平等しか欲しないという主張である。

> La Révolution, qui était la nourrice de Napoléon, ne tarda pas à lui apparaître comme une ennemie ; il ne cessa de la battre. […] Une expérience journalière fait reconnaître que les Français vont instinctivement au pouvoir ; ils n'aiment point la liberté ; l'égalité seule est leur idole. Or, l'égalité et le despotisme ont des liaisons secrètes. Sous ces deux rapports, Napoléon avait sa source au cœur des Français, militairement inclinés vers la puissance, démocratiquement amoureux du niveau.
>
> フランス革命は、ナポレオンの乳母であったが、すぐに彼にとって敵の如く立ち現れるようになり、彼は革命を攻撃することをやめなかった。（中略）フランス人は本能的に権力に向かうのだということが、日々の経験から認識できる。フランス人は自由など愛してはいない。ただ平等のみが彼らの崇拝の対象なのだ。 しかるに平等と専制主義との間には秘密の関係がある。こうした二つの関係のもとに、ナポレオンはその力の源を、軍隊のように大国を志向し、民主主義にのっとって平準を愛するフランス人の心に得ていた。(*M.O.T.*, Livre XXIV,

[68] Marc Fumaroli, *Chateaubriand. Poésie et Terreur*, Éditions de Fallois, 2003, « Chateaubriand et Tocqueville », pp. 719-760.

chapitre 6, t. I, pp. 1225-1226.)

かつてモンテスキューは、民主政を含む共和政体[69]のバネは「祖国への愛、平等への愛という政治的徳」であるとした一方で、専制国家においては「人間はすべて平等で、すべて奴隷である[70]」とも述べていた。これと同様、シャトーブリアンは、上記引用で、民主主義と平等と専制主義という三者間に潜む連帯関係を見ている。当然ながら、自由と平等とは真っ向から衝突することとなる。

> Le principe de l'aristocratie est la liberté, comme le principe de la démocratie est l'égalité ; […] Séparée de l'aristocratie, la démocratie ne tend à la liberté qu'en courant vers son principe, l'égalité : la liberté n'est pas pour elle un but, mais un moyen. Aussitôt que la démocratie a rencontré l'égalité qu'elle cherche, elle fait bon marché de la liberté.
> アリストクラシーの原理は自由である一方で、民主主義の原理は平等である。（中略）アリストクラシーから引き離された民主主義は、自らの原理である平等を求めることにおいてでしか自由に執着しないのだ。つまり、自由は民主主義にとって目的ではなく手段なのである。民主主義は自分が探し求める平等に出会ったとたん、自由を軽視し始めたのであった。
> (« Préface des Ouvrages politiques », dans *Opinions et Discours*, *Œuvres complètes*, Ladvocat, t. 23 (5e livraison), 1826 ; *M.O.T.*, t. II, « Appendice III », p. 1453.)

シャトーブリアンが尊ぶ自由とは、これまで見てきたように、かつてのアリストクラシーが保持していた美徳に支えられた自由であった。彼は 1825 年 10 月 24 日付け『ジュルナル・デ・デバ』紙[71]と 1827 年公刊『アメリカ紀行』において、自由には二種類があると述べて

---

69 モンテスキュー前掲訳書、52 頁。「共和政において、人民が全体として最高権力をもつとき、それは＜民主政＞である。最高権力が人民の一部の手中にあるとき、それは＜貴族政＞と呼ばれる。」Montesquieu, *De l'esprit des lois*, éd. cit., p. 239 : « Lorsque, dans la république, le peuple en corps a la souveraine puissance, c'est un *Démocratie*. Lorsque la souveraine puissance est entre les mains d'une partie du peuple, cela s'appelle une *Aristocratie* ».（イタリック体強調は原著者による。）

70 モンテスキュー前掲訳書、31, 81 頁。Montesquieu, *De l'esprit des lois*, éd. cit., p. 227, 258 : « ce que j'appelle la *vertu* dans la république est l'amour de la patrie, c'est-à-dire l'amour de l'égalité. Ce n'est point une vertu morale, ni une vertu chrétienne, c'est la vertu *politique* ; et celle-ci est le ressort qui fait mouvoir le gouvernement républicain […] Ce n'est point l'*honneur* qui est le principe des États despotiques : les hommes y étant tous égaux, on n'y peut se préférer aux autres ; les hommes y étant tous esclaves, on n'y peut se préférer à rien ». （イタリック体強調は原著者による。）

71 *Le Journal des débats* du 24 octobre 1825, repris dans *Polémiques*, *Œuvres complètes*, Ladvocat, t. 26 (11e livraison), 1828, p. 486 ; *M.O.T.*, t. II, « Appendice III », pp. 1469-1470.

いた。一つは、揺籃期の国民に見られる、習俗と美徳に支えられた「古い自由」であり、もう一つは、経験を積んだ国民の、啓蒙主義と理性が生んだ「近代の自由」であった。

> Le plus précieux des trésors que l'Amérique renfermoit dans son sein, c'étoit la liberté ; chaque peuple est appelé à puiser dans cette mine inépuisable. La découverte de la république représentative aux États-Unis est un des plus grands événements politiques du monde : cet événement a prouvé, comme je l'ai dit ailleurs, qu'il y a deux espèces de liberté praticables : l'une appartient à l'enfance des peuples ; elle est fille des mœurs et de la vertu ; c'étoit celle des premiers Grecs et des premiers Romains, c'étoit celle des Sauvages de l'Amérique : l'autre naît de la vieillesse des peuples ; elle est fille des lumières et de la raison ; c'est cette liberté des États-Unis qui remplace la liberté de l'Indien. Terre heureuse, qui, dans l'espace de moins de trois siècles, a passé de l'une à l'autre libetré presque sans effort, et par une lutte qui n'a pas duré plus de huit années !
> アメリカがその胎内に秘めていた宝物のうちで最も貴いもの、それは自由であった。各国民はこの尽きることない鉱脈に活力を得るよう呼びかけられている。合衆国における代議制共和体の発見は、世界の最も偉大な政治的事件のうちのひとつである。この事件から明らかとなるのは、私が他の場所でも言っているように、実現可能な二種類の自由が存在することだ。一つは揺籃期の国民のもので、習俗と美徳の娘である。それは、古代ギリシア人や古代ローマ人の自由であり、アメリカの未開人の自由であった。もう一つは、老年期の国民から生まれ、知性の光と理性の娘である。それは、アメリカ・インディアンの自由の代わりとなる合衆国の自由である。三百年に満たない間に、ほとんど努力することなしに、八年以上は続かなかった争いによって、一方の自由から他方の自由へと移行した幸いなる土地よ！ (*Voyage en Amérique*, p. 380.)

シャトーブリアンにとってのアリストクラシーの自由とは、「古い自由」であり、新しい自由とは対立するものであったが、トクヴィルにあっては、シャトーブリアンと同じく貴族的自由と民主主義的自由と二種類の自由が意識されつつも、それらは決して対立するものではなく、むしろアンシャン・レジームから共存してきたものと捉えられている。トクヴィルによれば、フランスにおいて自由の精神が 1789 年の革命とともに生まれたと考えることは誤謬であって、いつの時代でもフランス国民は自由の精神を、断続的に顕示しながら保持し続けてきた。封建時代のフランス的貴族ほど「熱烈で独立的な貴族」はどこにもお

らず、「中世のフランス的共同体においてほど、そして 17 世紀の初め（1614 年）までに種々の時期に召集された全国的三部会においてほど、民主的自由の精神が精力的な、そして野蛮ともいえるほどの特性をともなって示されたことはない」と主張している[72]。

このように、貴族的自由、民主主義的自由について、シャトーブリアンとトクヴィルでは、対立関係か共存可能かという認識の差異はあるとしても、現実として大革命を経てしまった社会を、平等の引き起こす専制主義から保護し、民主主義的自由を保証するものとして、言論の自由を要求しつづけたという点で、両者の主張は完全に合流するのである。シャトーブリアンは 1823 年から 1828 年にかけての検閲に抗議する論文で次のように述べている。

> Aucun homme n'a plus souvent constamment que moi, réclamé la liberté sur laquelle repose le gouvernement constitutionnel. […] La liberté de la presse a été presque l'unique affaire de ma vie politique ; […] C'est par la liberté de la presse que les droits des citoyens sont conservés, […]
> 立憲政体がその上に基礎を置く自由というものを、私ほど継続的に何回となく要求してきた人間はほかにいない。（中略）出版の自由は、私の政治人生におけるほぼ唯一の問題であった。（中略）市民の諸権利が保持されうるのは、出版の自由によってなのだ。(« Préface de *La liberté de la presse* », *Œuvres complètes*, Ladvocat, t. 27 (12e livraison), 1828, pp. iii-v ; *M.O.T.*, t. II, « Appendice III », pp. 1458-1459.)

他方トクヴィルは、言論（＝出版）の自由の力は、政治的意見のみではなく、あらゆる分野に及び、「法律を修正するだけでなく、習俗を変える」と説く。加えて、言論の放縦がもたらす災禍にも言及した上で、「人民主権と出版の自由とは、全体として切り離しえない二つのものなのである。これに対して、検閲と普通選挙の二つは相矛盾し、同一の国民の

---

72 トクヴィル「1789 年前後のフランスの社会的並びに政治的状態」（1836 年発表）、『アンシャン・レジームと革命』井伊玄太郎訳、講談社学術文庫、1997 年所収、67-68 頁。Alexis de Tocqueville, *État social et politique de la France avant et depuis 1789* (1836), dans *Œuvres III*, édition de Françoise Mélonio, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2004, pp. 33-34 : « C'est une grande erreur qu'on a souvent commise, de croire qu'en France l'esprit de liberté soit né avec la révolution de 1789. Il avait été de tout temps l'un des caractères distinctifs de la nation ; mais cet esprit s'y était montré par intervalles et pour ainsi dire par intermittence. Il avait été instinctif plus que réfléchi ; irrégulier, tout à la fois violent et faible. Il n'y eut jamais de noblesse plus fière et plus indépendante dans ses opinions et dans ses actes que la noblesse française des temps féodaux. Jamais l'esprit de liberté démocratique ne se montra avec un caractère plus énergique, et je pourrais presque dire plus sauvage que dans les communes françaises du Moyen Âge et dans les états généraux qui se réunirent à différentes périodes, jusqu'au commencement du XVIIe siècle (1614) ».

政治制度に長く同居しえないものである」と主張し、民主主義社会における自由の「構成要件」として「出版の独立」を確信するに至っている[73]。

さらに、トクヴィルは、言論の自由の承認は、真の自由を築くための出発点でしかないことを指摘する。出版の自由が初めて承認された世代では、人々の習慣はすぐには変わらず、「深い考えなしに信ずる対象が毎日変わるだけである」が、やがて「経験が熟し、人々は懐疑に陥り、普遍的な疑念に囚われる」と、革命の時代を描写している。そうした多くの人が何かを信ずるべきか分からないでいるとき、知識に基づいた「懐疑の波にさらわれても揺るがぬ信念」を得るためには、叡智ある人々、あるいは知的エリートと呼べる人々、そういった人間たちの不断の努力が、結局は不可欠であることを説いている[74]。

しかし、シャトーブリアンも言論の自由のもたらす災禍を決して認識していなかったわけではない。『革命試論』の 18 世紀の摂政時代から革命期についての社会の変動を説明した一節において、大革命を準備することになった「出版」を「天上的かつ悪魔的な発明」と呼び、さまざまな文書を「吐き出し始めるところであった」と評していた[75]。さらに、1826 年のラドヴォカ全集版刊行時にシャトーブリアン自身が加えた注でも、やはり、検閲を非

---

[73] トクヴィル『アメリカのデモクラシー』第一巻、松本礼二訳、岩波文庫（下）、2005 年、22-23, 25, 42 頁。Alexis de Tocqueville, *De la démocratie en Amérique I* (1835), dans *Œuvres II*, édition de James T. Scleifer, Jean-Claude Lamberti, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1992, p. 202, 204, 215 : « La liberté de la presse ne fait pas seulement sentir son pouvoir sur les opinions politiques, mais encore sur toutes les opinions des hommes. Elle ne modifie pas seulement les lois, mais les mœurs. […] J'avoue que je ne porte point à la liberté de la presse cet amour complet et instantané qu'on accorde aux choses souverainement bonnes de leur nature. Je l'aime par la considération des maux qu'elle empêche bien plus que pour les biens qu'elle fait. […] La souveraineté du peuple et la liberté de la presse sont donc deux choses entièrement corrélatives : la censure et le vote universel sont au contraire deux choses qui se contredisent et ne peuvent se rencontrer longtemps dans les institutions politiques d'un même peuple. […] Plus j'envisage l'indépendance de la presse dans ses principaux effets, plus je viens à me convaincre que chez les modernes l'indépendance de la presse est l'élément capital, et pour ainsi dire constitutif de la liberté ».

[74] トクヴィル前掲訳書、35-36 頁。Tocqueville, *De la démocratie en Amérique I*, éd. cit., p. 211 : « Lorsque la liberté de la presse trouve les hommes dans le premier état, elle leur laisse pendant lontemps encore cette habitude de croire fermement sans réfléchir ; seulement elle change chaque jour l'objet de leurs croyances irréfléchies. […] C'est le temps des révolutions subites. Malheur aux générations qui, les premières, admettent tout à coup la liberté de la presse ! Bientôt cependant le cercle des idées nouvelles est à peu près parcouru. L'expérience arrive, et l'homme se plonge dans un doute et dans une méfiance universelle. On peut compter que la majorité des hommes s'arrêtera toujours dans l'un de ces deux états : elle croira sans savoir pourqoui, ou ne saura pas précisément ce qu'il faut croire. Quant à cette autre espèce de conviction réfléchie et maîtresse d'elle-même qui naît de la science et s'élève du milieu même des agitations du doute, il ne sera jamais donné qu'aux efforts d'un très petit nombre d'hommes de l'atteindre ».

[75] *Essai sur les révolutions*, p. 1093 : « La presse, cette invention céleste et diabolique, commençoit à vomir les chansons, les pamphlets, les livres philosophiques ».

難しつつも、出版は法によってのみ規制されるべきであるとしている。

> La presse n'est diabolique que lorsqu'elle n'est pas réglée par des lois. Si vous l'enchaînez par l'arbitraire, c'est-à-dire par la censure, elle perd ce qu'elle a de céleste, et ne conserve que ce qu'elle a de diabolique. Personne n'approuve les abus de la presse ; mais c'est aux lois seules à prévenir et à punir les abus.
> 出版というものは、法によって規定されていない時にのみ、悪魔的となる。もしあなたが専制、つまり検閲のことであるが、それによって出版を従えるなら、それは元々備えている天上的なるものを失い、ただ悪魔的な性質を残すのみである。何人も出版の濫用を認めない。だが、法によってのみ、そうした行き過ぎを未然に防ぎ、また罰するべきなのである。(*Essai sur les révolutions*, p. 1093.)

このように、シャトーブリアンはトクヴィルに先駆けて、フランス革命の象徴である自由と平等が相反する性質をもつことを看破したうえで、民主主義社会において自由を保証する手段である「出版の自由」を、いかにしてその濫用による暴力を防ぎながら実現していくべきかを模索していたのである。

――第 3 節　羽根ペンの決闘家、言論の自由をめぐって

前節で検討してきたように、出版の自由にこだわり続けたシャトーブリアンであるが、この問題の重要性に彼の注意を向けさせたのは、革命という動乱の時代の経験であることは疑い得ないが、とりわけ若い頃に影響を受けたのは、彼が尊敬してやまなかったマルゼルブからではなかろうか。マルゼルブは、百科全書を支援し、ルソーを保護したことで知られる開明的な行政官であった。出版統制局長在任期間中(1750－1763)には、反王権、反宗教的な文書を規制すべき立場でありながら、国民の精神的発展には新思潮が必要であるという大義のため、高等法院や聖職者から啓蒙思想に属する著作へ加えられる攻撃の火の粉をあらゆる手立てを用いて振り払った。青年シャトーブリアンに新大陸見聞を勧めたことでも知られ、大革命が勃発して後は、引き受け手のない国王ルイ 16 世の弁護人をわが身に降りかかる危険も顧みずに務めた。最後は 1794 年 4 月、孫娘の婿であるシャトーブリアン

の兄とともに断頭台の露と散った。そのマルゼルブは、出版統制局長時代の 1759 年に『出版論』、そして革命前夜の 1788 年に、1614 年以来 170 年ぶりに召集されることとなった全国三部会に向けて、『出版自由論』を記している（1809 年公刊）。これらの論文においてマルゼルブは、言論・討論の自由の基盤としての出版の自由を主張しており、絶対王政の官僚でありながら限りなく共和主義的である。他方、扇動的な人間によって大衆が衆愚政治に陥らないよう、冷静かつ思慮深い著作家によって国民が啓発される必要があり、旧体制下でいきなりの無条件の言論の自由化には賛成していない[76]。

マルゼルブの死後、1881 年第三共和政のジュール・フェリーJules Ferry のもとで、ついに出版の自由が確立されるのだが、フランスでは実に約百年間、出版の自由は恐れられ、拒否されると同時に切望され続けたのである。これは、1789 年の人権宣言に高らかにうたわれた「自由」を、実際に法律として公布しようとするとき、フランスの自由主義がとらわれてきた矛盾の表れであろう。すでに 19 世紀の初めの復古王政時に、1814 年、ルイ 18 世が公布した憲章 la Charte によって出版は飛躍をとげる[77]。そして 1819 年（5 月 17 日、5 月 26 日、6 月 9 日）ギゾー、ド・ブロイ de Broglie、ド・セール de Serre の手によって成立した法律は、検閲の廃止や事前認可« autorisation préalable »の廃止によって「出版の自由」を促進したと評価されてきた。しかし、実際には、出版事業に供託金や宣誓を課すことによって、印刷・出版にかかわる者を、社会上層部、政権により近い階層に選別していく傾向が生まれた[78]。そうした社会エリートたちは、やがて新聞を所有することになり、こうなれば、新聞に本来求められている、権力や社会組織に巣食う腐敗を監視する機能は失われて、むしろ権力の中枢が世論操作に用いる道具と化してしまう危険がある。つまり、1819 年の法律は、万人に与えられた「自然権」としての「出版の権利」を認めているとはいいがたいのである。

復古王政時、王党派は出版を耐え忍ぶべき試練のように考えていた。そして、この党派の自他共に認めるリーダーとしてのシャトーブリアンの態度にも、出版、とりわけ定期刊

---

[76] Chrétien-Guillaume de Lamoignon de Malesherbes, *Mémoires sur la libraire, Mémoire sur la liberté de la presse*, présenté par Roger Chartier, Imprimerie Nationale, 1994.　Cf.木崎喜代治、前掲書、156-209 頁。

[77] Cf. Georges Duby, *Histoire de la France des origines à nos jours*, Larousse, coll. « In Extenso », p. 591.

[78] Lucien Jaume, « Heurs et malheurs de la liberté de presse », in *Liberté, libéraux et constitutions*, sous la direction de Jean-Paul Clément, Lucien Jaume et Michel Verpeaux, ―colloque de la Vallée-aux-Loups, 23 septembre 1994―, Economia, 1997, pp. 49-51 (pp. 43-59).

行物（新聞）に対する恐れが明白である[79]。だが、恐れると同時に、彼は従来の書物とは異なる定期刊行物の果たす役割も理解している。1825 年 10 月 24 日付けでシャトーブリアンは定期刊行物について以下のように述べている。

La presse périodique est une force immense sortie de la civilisation moderne : on ne l'étoufferoit ni par la violence ni par le dédain. Née des besoins de la société nouvelle, elle a pris son rang parmi ces faits que les hommes n'abandonnent plus, une fois qu'ils en sont saisis ; elle a remplacé pour nous la tribune populaire des anciens ; elle est à l'imprimerie ce que l'imprimerie a été à l'écriture. […] Il faut vivre, quoi qu'on en ait, avec la boussole, la poudre à canon, l'imprimerie, et, de nos jours, avec la machine à vapeur : c'est fort malheureux sans doute, mais c'est comme cela ; qu'y faire ?

Ainsi la presse périodique proclame aujourd'hui des vérités qui n'étoient autrefois renfermées que dans des livres ; elle les rend familières et les met à la portée de tous.

定期刊行物は近代文明から生まれた巨大なひとつの力である。それは暴力によっても軽蔑によっても、押さえつけることはできないであろう。新しい社会の必要から生まれた定期刊行物は、人間たちがひとたび心を奪われたら、もはや手放すことができなくなるあれらの事物（ces faits=les grandes découvertes qui ont changé la face du monde ; 地球上を一変させた偉大な発明・発見の数々[訳者注]）のなかにその地位を占めることとなった。それは我々にとって古代人の演壇の代わりとなった。そして、今の印刷業にとって、かつて手書の文書にとって印刷術がそうであったものと同じものである。（中略）我々は何があろうと、コンパス、大砲の火薬、印刷術とともに生きねばならないのだ。そして現代では、さらに蒸気機関とともに。そうした事態はなるほど非常に不幸なことであろうが、しかし状況はこうなのだ。いったい何ができる？

そういうわけで今日、定期刊行物は、かつては書物のなかにのみ閉じ込められていた真実を声高に叫んでいる。そして、それらの真実を身近なものとし、全ての人々の手の届くところにもたらしている[80]。

シャトーブリアンは新しい形の印刷物の力の大きさを恐れつつも、上の引用の下線部の

---

79 Michel Lelièvre, *Chateaubriand polémiste, l'écrivain de combat, l'émigré sous le consulat et l'empire*, t. 1, P.U.F., 1983, pp. 24-25.

80 « Du discours d'adieux du président des États-Unis au général La Fayette » du 24 octobre 1825, repris dans *Polémique* ; *Œuvres complètes*, Ladvocat, t. 26, 1828, p. 474.

ように、「真実を身近にし、全ての人々の手の届くところにもたらしている」という長所も認めているのである。

また、七月革命前夜にシャルル 10 世により発布された言論の自由を廃止する七月勅令(1830 年 7 月 25 日)を振り返り、以下に引く『墓の彼方からの回想』においても、新しい時代に出現した「力」を受け入れて、コントロールすることを提唱する。

La presse est un élément jadis ignoré, une force autrefois inconnue, introduite maintenant dans le monde ; c'est la parole à l'état de foudre ; c'est l'électricité sociale. Pouvez-vous faire qu'elle n'existe pas? Plus vous prétendrez la comprimer, plus l'explosion sera violente. Il faut donc vous résoudre à vivre avec elle, comme vous vivez avec la machine à vapeur. Il faut apprendre à vous en servir, en la dépouillant de son danger.

出版はかつて全く知られていなかった要素であり、未知の力であったが、今は世界に導入されている。それは雷の状態の言葉であり、社会の電気である。あなたは出版が存在しないようにできるだろうか？あなたがそれを抑制しようとすればするほど、その爆発は激しいものとなろう。したがって出版とともに生きる覚悟をしなければならない。ちょうどあなたが蒸気機関と生きるように。出版のもつ危険をはぎとって、それを利用することを学ばねばならないのだ。(*M.O.T.*, Livre XXXI, chapitre 8, t. II, p. 368.)

このように、シャトーブリアンは出版の力をただ耐えるのではなく、理解し、使いこなすことを主張している。「危険をはぎとる」具体的な手段としては、すでに『憲章による王政について』*De la Monarchie selon la Charte* (1816)において以下の供託制度を提案していた。

Mais la liberté de la presse a des dangers. Qui l'ignore ? Aussi cette liberté ne peut exister qu'en ayant derrière elle <u>une loi forte</u>, <u>*immanis lex*</u>, qui prévienne la prévarication par la ruine, la calomnie par l'infamie, les écrits séditieux par la prison, l'exil, et quelquefois par la mort : le Code a sur ce point la loi unique. C'est aux risques et périls de l'écrivain que je demande pour lui la liberté de la presse ; mais il la faut cette liberté, ou, encore une fois, la constitution n'est qu'un jeu.

Quant aux journaux, qui sont l'arme la plus dangereuse, il est d'abord aisé d'en diminuer l'abus, en obligeant les propriétaires des feuilles périodiques, comme les notaires et autres agens publics, à fournir un cautionnement. Ce cautionnement répondroit des amendes, peine la plus juste et la plus

facile à appliquer. Je le fixerois au capital que suppose la contribution directe de mille francs, que tout citoyen doit payer pour être élu membre de la chambre des députés.[…] Vous seriez par ce moyen débarrassé de la foule des papiers publics. Les journalistes, en petit nombre, qui pourroient fournir ce cautionnement, menacés par une loi formidable, exposés à perdre la somme consignée, apprendroient à mesurer leurs paroles.

しかし、出版の自由にはいくつか危険がある。知らない人がいるだろうか？したがって出版の自由は、その背後に強力な法があってのみ存在しうるものである。その*恐ろしい法*は、破産により背任を予防し、屈辱により中傷を制し、扇動的な檄文を監獄や流刑や、時には死刑によって未然に防ぐものだ。法典はこの点において唯一の法を持っている。私が作家のために出版の自由を要求しているのは、まさしく作家の危険性と脅威においてなのだ。だが、この自由は必要なのだ、さもなくば、またもや憲法はただのお遊びでしかないことになる。

新聞については、それらは最も危険な武器であるが、まずは定期刊行物の所有者に、公証人や他の公的代理人と同様、一定の供託金を払うよう義務付けることによって、その力の濫用を減らすことは容易である。この供託金は、必要な場合には、最も正しく最も簡単に適用できる罰、つまり罰金の支払いを引き受けることであろう。私ならば、全市民が下院議員に選出されるために支払わねばならない千フランの直接税から察せられる資本額に設定するだろう。（中略）あなた方はこの方法で大量の新聞記事から解放されるだろう。新聞記者たちのうち少数の者たちだけがこの供託金を払うことが可能であろうし、彼らは恐ろしい法律によって脅かされ、供託した金を失う危険にさらされ、自分たちの言葉を慎むことを学ぶであろう。(*De la Monarchie selon la Charte*, chapitre XX, « Dangers de la Liberté de la Presse. Journaux. Lois fiscales. », pp. 345-346.)

供託金を出版人に課すことは、印刷業を社会のより上層部へ絞っていき、出版の多様性を制限していく傾向を生むのだが、シャトーブリアンは「恐ろしい法律」である供託制度が出版の暴走を防ぐ手段と考えていた。

もちろん、シャトーブリアンも、権力と出版に携わる人間が、同一のグループになってはならないと考えていた。彼の理論において、世論とは、議会制国家において必要な、政治権力の外部に存在すべき「もうひとつの法廷」であった。そして正しい世論が形成されるために、新聞は権力から独立して、公衆にものごとの真実を伝える責務がある。以下のように 1816 年にはすでにこの考えを表明している。

Point de gouvernement représentatif sans la liberté de la presse. […] Dans un gouvernement représentatif, il y a deux tribunaux : celui des Chambres, où les intérêts particuliers de la nation sont jugés ; celui de la nation elle-même, qui juge en dehors les deux Chambres. Dans les discussions qui s'élèvent nécessairement entre le ministère et les chambres, comment le public connoîtra-t-il la vérité, si les journaux sont sous la censure du ministère, c'est-à-dire sous l'influence d'une des parties intéressées ? Comment le ministère et les Chambres connoîtront-ils l'opinion publique, qui fait la volonté générale, si cette opinion ne peut librement s'exprimer !

出版の自由なしに代議制はありえない。（中略）代議制においては、二つの法廷がある。ひとつは議院の法廷であり、そこでは国民の個別の利害が判断される。もうひとつは国民自身の法廷であり、外から両院を判断するのである。内閣と議会の間で避けられない論争が持ち上がったとき、もし新聞が内閣の検閲の統制下にあるなら、どうやって公衆は真実を知るのだろうか。それはつまり当事者の一方の影響下にあるということだ。どうやって内閣と議会は国民全体の意思を形成している世論を知るのだろうか、もし世論が自由に表現されないならば！(*De la Monarchie selon la Charte*, chapitre XVII, « De la Liberté de la Presse », p. 342.)

つまり、シャトーブリアンにとっての最優先事項は、出版の権力からの独立であった。そのためには、なんとしても検閲を廃止せねばならないと考えた彼は、出版業届出における供託制度を提案したのだった。のちに、1835 年、コルシカ出身の無政府主義者フィエスキ Fieschi によるルイ＝フィリップ暗殺テロ未遂事件が起こり、出版に対する一連の過酷な措置が採決にかけられた。その際、議員の一人から、シャトーブリアンが 1816 年に提案した「恐ろしい法」*immanis lex* にまで至るようなことはない、と悪意のこもった引用をされた。そのとき、彼は以下のように反論した（1835 年 8 月 23 日刷 *La Quotidienne* 紙宛ての書簡を、共和派の *Le National* 紙が再録。）

La monarchie selon la Charte a été écrite en 1816. Il s'agissait de faire abolir la censure. J'étais alors, comme je le suis toujours, placé dans les rangs des royalistes qui, par leurs mœurs, leurs habitudes, penchaient aux formes de l'ancienne monarchie et regardaient la liberté de la presse comme un fléau. Je désirais leur faire adopter les formes de la nouvelle monarchie. Or, sans la liberté de la presse, sans l'abolition de la censure, cette monarchie est impossible. Pour arriver à mon but, pour rassurer des

esprits timides, antipathiques à ce que je proposais, je demandais des lois menaçantes, en échange de la censure, bien sûr que, quand j'aurais obtenu l'abolition de celle-ci, j'aurais en effet tout obtenu. […] Une fois la censure abolie, quelle a été ma conduite ? Vingt années de ma carrière politique ont été employées depuis 1816 à la défense de cette liberté dont j'avais conquis le principe. J'ai combattu toutes les lois par lesquelles on voulait l'entraver : j'ai tout sacrifié pour cette liberté : places, fortune, honneurs.

『憲章による王政について』は 1816 年に書かれたもので、検閲を廃止させることが目的であった。当時私は、といっても常に私は王党派なのであるが、彼らの習俗、彼らの習慣によって、古い王政に傾倒し、出版の自由を災禍の如く見なしていた王党派のグループの一人とされていた。私は彼らに新しい王政の形を採用させたかった。さて、出版の自由なくして、検閲の廃止なくして、この新しい王政は不可能である。私の目的達成のため、臆病で私の提案に反感を持っている人たちを安心させるため、私は検閲と引き換えに、脅迫的な法律を要求していたのだ。もちろん、検閲の廃止を獲得した暁には、私は実際すべてを獲得したことになったであろう。（中略）ひとたび検閲が廃止されたら、私の振る舞いはどんなであったか？私の 20 年に及ぶ政治的キャリアは、1816 年以来、出版の自由の擁護に向けられてきたし、その自由の原則は私が勝ち取ったものだ。私はそれらによって出版の自由を妨げようとする全ての法律を打ち負かした。私はこの自由のために全てを捧げたのだ、地位も、財産も、名誉も[81]。

シャトーブリアン自身、ナポレオン帝政時の 1807 年に『メルキュール・ド・フランス』の所有者の一人となった頃には、この文芸雑誌を「選り抜きの広告手段[82]」として使っていたし、復古王政時には、政界での不遇を挽回するかのように、『ル・コンセルヴァトゥール』le *Conservateur*（1818-1820）の創始者、『デバ』紙 les *Débats*（1824-1830）の指導者、そして「出版の友協会」la Société des amis de la presse（1827）の創設者として、出版を通じて世論に大きな影響を及ぼしていた[83]。そこには世紀病を巻き起こした『ルネ』、『アタラ』のメランコリックな主人公＝作者としての姿はない。サント=ブーヴの表現を借りれば、ロンス

---

[81] *Lettre à La Quotidienne*, 23 août 1835, citée par Jean-Paul Clément dans *Grands écrits politiques*, t.I, p. 481.
[82] Alain Guyot, *art. cit.*, p. 65.
[83] Note 38 de la page 342 sur *De la Monarchie selon la Charte*, donné par Jean-Paul Clément, dans *Grands écrits politiques*, t. II, p. 479.

ヴォーの谷での騎士ロランのように、敵の軍勢を自分ひとりで片づけることができると信じる「羽根ペンの壮麗な決闘家」« un magnifique duelliste de plume [84]»であり、まさしく政治論客である。

今日シャトーブリアンは、まずはロマン主義文学の先駆者として想起されるのが一般的であるが、第三部の考察を通して見ると、文学を超えたより広い次元で、マルゼルブやバークといった 18 世紀のリベラルな価値観を備えていた保守政治家の思想に導かれながら、革命の生き証人として「自由」のあり方を考え、トクヴィルなどの次の世代への橋渡しとして存在していることが分かる。彼の政治論客としての才覚と詩的な感性と、双方を踏まえてこそ、彼のテクストに、古い時代の人間のノスタルジックな感情と、新しい時代を切り開くために必要な客観的考察との板ばさみに苦しむ姿が刻み込まれていることがより明確に把握できるであろう。『墓の彼方からの回想』にある、シャトーブリアンの自由の擁護者たらんとする宣言を見よう。

> Je ne suis point à la mode, je pense que sans la liberté il n'y a rien dans le monde ; elle seule donne du prix à la vie ; dussé-je rester le dernier à la défendre, je ne cesserai de proclamer ses droits.
> 私は少しも時流にのっていないので、自由なくしては世界には何もないと考える。ただ自由のみが人生に価値を与えるのである。私が自由を擁護する最後の者としてあり続けねばならぬとしても、私は自由の権利を主張することを止めはしないだろう。(*M.O.T.*, Livre XXIV, chapitre 7, t. I, p. 1229.)

「少しも時流にのっていない」とは、18 世紀人の生き残りとして発した言葉であり、もはや自分たちの世代が主役の時代は過ぎ去り、新しい世代に引き継いでいかなければならないという諦めに似たものが感じられる。だが、かつて青年シャトーブリアンは、ジャコバン派による恐怖政治下、人々（＝民衆）が、罪悪感をもつことなく、人間ひとりひとりが備えた個人としての価値や感情を消去して、殺人行為をシステマティックに遂行しうる

---

[84] Sainte-Beuve, *Chateaubriand et son groupe littéraire*, Paris, Garnier Frères, 1948, t. II, p. 344 : « Adversaire royal, et plus sûr même aux adversaires qu'aux amis, aimant les coups d'épée, sachant les rendre au centuple à la face du soleil, c'était un magnifique duelliste de plume, un paladin que tentaient les hasards de la lice ; il croyait, comme Roland à Ronceveaux, qu'il suffirait seul, au besoin, à pourfendre toute l'armée des infidèles ».

ことを見た。彼はこうした現象のなかに、完全なる平等を志向する運動（水平化）の看板がいくら素晴らしくとも、その裏に、有無を言わさず個の自由を剥奪していこうとする平等の専制主義を感じとっていた。王政、帝政、共和政、民主政、いかなる政体になろうとも、専制主義に陥る危険は常に潜んでおり、「自由」という権利を保持しつづけようと強く意識しつづけなければ容易に失われてしまうのだ、とフランス国民に警鐘を鳴らし続けることが、シャトーブリアンが自らの後半生に課した重要な使命であったのだ。